

大枝桑國考

上

ル 3
4003
1

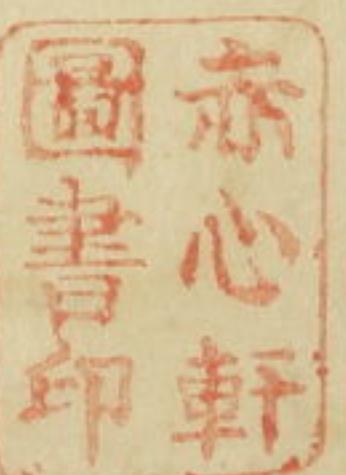


4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5

大扶來國考序

大壑平先生奉

帝道惟一之皇誥學顯幽分二之
神道而其器環朗其識英逸立
筆如水著書如土議論拔山精
純淘金固不待降明等之贊也



布綸趺

東叡山大王之奉覲而眷顧有
來爲若失古史及徵靈真柱等
數部往來既因豐田少進而敲
諸府內

大主感賞特有是賜繩者大扶來

國考及三五本國考二部繕寫
已成使隆明復獻之

大王瞧覽數月後問謂隆明曰方
今古學大振俊士崛興然未嘗
聞有撰彼外邦之載籍而明我
神州之興教者也今也乃有此

撰哉可謂足治未學之舊弊為後進之木鐸矣吾將更以一部

倫吟

僂洞乙夜之御覽焉。隆明謹而承
楚肯乃。捉吼傳請先生先生率爾
豆喜且泣曰。嗚呼竊嘆之談庸

夫之是誠無徒集寫而夕辱
眷顧更奉是教何奪加焉異
爲我道諫其教育。哎為之序。
隆明唯二不敢吼不敷辭焉剖
闕方成吟是乎葉此事吼冠其
首云

天保七年歲次丙申仲冬癸巳
東省府臣 繩藤啓明謹識

氣吹翁人 脲田信親謹書

大扶桑國考序

高山ヲ登リて見度する事人々のころろく
よて國原海原おほうよ見放ちてもゆ其
見度の佳よいをのい愛あほく歌うみ文はよよ
よよ小観くわんぶり又えの寄よかこは鳴なるとこよ
やよに見分わざめて遠とき近ちきよ測そくりかむく
陸よき海よくよべづきとむなこる有り

同上見度。其見る人一様より、既など
有りもとて壁以て覗きこと有りよりて先づ考
でてよ氣吹屋の平田吾兄識高く学ひ博きハ
其事はもじねむかひく書ありやうねる倫ひ云
てからて參へ皆人の見立てるところなれど。
今まことに言舉せし。然ふその考一論奇す也。
るとさぐり妙す頭もとときもりて世人の思慮

の外に出る事多く多事よりてぢやひ
少しあしゆくも有りてうりて是を彼高山の見
度よとて言ふ。平田吾兄の見度普通乃
ちよくしかつばん。もともとそれを利眼
あるうへお選えらび。磨きみかけ遠鏡とま
取て。天の高峯の絶頂す立て日経日緯。四
方八方遍く見まけ見よし。潮の八百重の洟

津嶋。向伏雲よさうの国。あつる方れく
残るくまよく見分き見さる。其嶋よも
何木生さ。彼國よハ何入住り。そこそ近く
かること遠く。まつもよゆあや千里の
外を眼前の如く。ときふやし言ことすりと彼
かほりこす覗ふ人こそ近とぞ意とりぬよ。
まゝて遙く思ひよねば。放鷺のミーを怪ふ

りと又こゑやうに見そる人とい。手速を各々
眼のきくみ見及つ。其かねよそえ。けくも
測かむえ知て。われ。今吾見のちよ。寔耳
さも有へ。すの計。よもたえざりりと
喜ひ。愈ゆ。或ひ其志あきよ。彼方よ依る。
此方と定むるよ。まつかれよ。きこゆ
よりも大功績と賞感氣をひくよ物う。

直眼と遠鏡との間よ思ひうて。り後であま
さうしきが。鏡の善悪もえどもだ。とす磨く
ことよも知らぬてひどあゆす新奇き方よ
のをあそびのつて彼此とこへ見たり。まき
らへはて。海ゆき陸ゆき本つ道としや
まちやせひとと遠き慮みややぶむやう。
おの走力をも足弱くて。いまく段中よどま

至らじざれど時りり峯上よ登り得とむ
よ。あくも見てかくもあてし。あふりあく
をくふく思ひよくことのわゆ。も吾兄也
ありと同一事ゆよ其言きくよ。さう打
りひ其虫みるか思ひゆひて。葉なうすよ。ま
き峯上よかけどもいづく。共よ見度し遠
鏡ともかり見る。うちて。うれしくも

樂一くもあ存するより。板本をひるはさり
ゆも言をもと。稿本かて全うしゆともひ出
見つり。それ利眼りしるまじら男の大き見
うるをかこそひれあぐらやまことくる耳
此度この大扶桑国考板本ももむり。序文
もすよとひあとされたりとおみきおのゆく
靈ある学の兄弟とかしまくられまととの

うれしきよ拙きよ思をして以ぞ此考の妙小
奇一く。仰き信へきよせ。ひやある序文つ
くりと。其詞ありひ回りんと。思ひよく
さしわづぬ人の一巻二巻と。力のうまいに著
出よひよこそ。其をほりとて。とりよせ
よの序文とも添え。吾兄のうへふて。何をうけ
態すとゆべ。本論わくとの別記あると。まち

とくづひとく。拙き同かまちひよりや。まく。
玄まきらしとくひも。必吾兄の意ふもう。引
ひとく。此序詞ともゆくに有り。ゆゆに
あり。が思ひよるひねをこそと。かくくく
一き長言を書け。もむ。みる。

天保七年八月 伊勢 大神 安守

大扶桑國考上卷



備前國 葉合大枝
門

諸越古書とも残闇。其國の古傳也。東方大荒外
扶桑國と称する神真の靈城。君師れ本国なりて。その國

人

遠江國 關 武雄 同
上總國 大高秀明 校

大壑 平篤胤撰述

諸越古書とも残闇。其國の古傳也。東方大荒外
扶桑國と称する神真の靈城。君師れ本国なりて。その國
初小出興せ。三皇五帝を云ふは。謂する扶桑國より出
て。万づの道を聞きとる趣。小聞。採り集めて。熟す誓
ふる。其扶桑國ともい。謂する。畏きや吾が天皇命也。神
形うち知食に。皇大御國の事か。其三皇五帝と聞え。

は。我ク皇スガミタナ神等スル御坐カニシテ。其ハ固モト然シカ道コト
理アキラシス。今ホエの由緒スル述テ。かホも天照坐大御神スル本ハ
御國スル大御先スル輝カニシテ。既ヤく此方スル古人トコロ。其ハ
扶桑スル云ハ。皇國スル漢名スル為スル。詩賦文章スル類スル。往スル
徃用スル。そノ三代スル美錄清和天皇紀スル僧宗香スル傳スル文スル。八スル年
同舟解スル艦歸スル著スル本朝スル天慶六年スル。日本紀竟宴スル哥禍スル朝臣直幹
の序スル。聖上纂スル統スル天下スル。每ハ為スル扶桑スル將スル泛スル一スル兼スル宗督
云ハ。云ハ。尚スル古スル詩文スル集スル等スル見スル。知スル。但シ。日向スル
凡土記スル。大足彦天皇スル世幸兒湯スル之郡スル。遊スル於丹裳スル之小野スル。謂スル云
左右スル。曰スル。此國スル地形スル。直向スル扶桑スル宣号スル日向スル也スル。有スル。此國スル地形
直向スル。日向スル。詔スル。むと。かく文詞スル。其ハ是スル宣号スル日向スル。歌文
行スル。小て。エク聞スル。されど。こは扶桑スルと皇國スル。まゝ歌文
の名スル。と為スル。例スル。吳スル。思スル。ひ錯スル。べからば。

の集紀事スル書スルの名スル。負スル。近スル世スルの学者スル。ちは。其ハ

と非スル論子スル。跡スル。許スル。多スル。あり。然スルれど。此スル古人トコロ。皇國スル小當スル
云ハ。實スル小叶スル。其ハ非スル。云ハ。へる後スル人の論スル。却スル。りて。非スル
不スル。有スル。扶桑スル皇國スル小當スル。云ハ。書スル。名スル。紀齊名スル朝臣スルの扶桑
集。藤原長清スル朝臣スルの夫木スル和歌集。皇圓法師スル扶桑略記。水戸
殿スル扶桑拾葉集スル。是スル。か。大江匡房スル御スルの靈撰スル者スルの要スル。奥スル云ハ
見スル。扶桑集スル。名スルけふ。有スル。其ハ由スル。黃門スル為スル相卿スル。
語スル。し。く。扶桑スル日本國スル總名スル。かれ。憚スル。わ。扶字スルの教
育スル。由スル。見スル。下学集スル。扶桑國スル。日本惣名スル也。朝スル。敷スル。若木
扶桑スル之指スル。故スル呼スル。日本スル云ハ。扶桑國スル也。ト。い。い。日本スル紀纂疏スル。凡スル吾
國スル名スル通スル。和漢スル。有スル。一十三スル。と。云スル。中スル。六スル。曰スル。扶桑國スル。東海スル。有スル
扶桑スル兩幹スル同根スル。所出スル。如スル。故スル借用スル。わ。此スル非スル。セ。說スル。松
下見林スル。異称スル。日本スル傳スル。升訛張スル。秀スル俗スル說辨スル。す。見スル。未スル
小論スル。如スル。さて。塙裏抄スル。磧取スル。盧鳴スル。條スル。兼スル名花スル。扶木スル
一名方四スル。一名方出スル。と。云スル。て。も。られ。ど。其所出スルを。知スル。ぢ。

斯^テ扶桑^ト云ふ名の古く彼国籍^{シテ}所見^ムる。山海經^カ
ア^リ此經^の海外東經^{とい}ふ篇^ス。立^ベ出^セる地名國名^の。ナ
ル^ク皇國^{分内}なる由^ト誓^ヘ明ひれ^ル扶桑^ト指^シる國^の。皇
國^トるこ^ト甚^詳小^シを知^ルめ^ル。抑^テ是經^はも漢^の劉歆^ケ校
定^の表^ス。禹定九洲而益等類^ヲ物^ヲ善惡著^ス。此古^ノ皆聖賢之遺事[。]
古^ノ明著^ス者^也と記^ス。王充論衡^小禹益竝治洪水[。]禹主治水[。]
益主記異物海外山表無遠不至以所聞見作^ス山海經^ト云^ハ。
且^ハ周代^ノ古^文列子^モ引^ク文有^レ。此よ^ク古^文有^レ
る[。]中^ニ周代^ノ加^リ文^カ。又^ハ漢代^ノ加^リ文^篇も
有^リ。そ^ノ判然^トか^ル。後人是義^ト得知^ラ。此古^文を

疑^フ倫^モ多^ク有^ス。深く攷^ス者^少。然^る清^の姚
出考^ス。山海經漢志不著撰人名^ヲ。劉歆以^テ禹伯益撰^可笑^ス。經
中^ニ言^フ夏后氏殷王文王^{且^ハ}言^フ長沙零陵雁門諸郡縣^{歆不知}敷
推^シ此蓋秦漢間人所^作者^也。已^ハ多^論之矣^ト。四庫全書
提要^{及^ビ}簡明目錄^も同說^ス。司馬遷^{称^ス}則亦周秦以來
之古^文也[。]と云^ヘり。司馬遷^{称^ス}史記大宛傳^の末^ニ太
史公曰至禹本紀山海經所有怪物余不敢^ア言^ス也[。]ト有^リと
云^フ。また偽出考^ス。入己多論^ス。と云^フ。杜佑過典鄭
樵通志胡元瑞筆叢^モ早^ク論^ヘると謂^フ。爰^モ近項清^の李^坑
堅^所志[。]又夏草曰大禹曰地之所載云々。四十七字是經海外
南經文[。]又呂氏春秋本味篇[。]按伊尹說多取此經夏草伊尹皆
湯時人[。]則此經為夏古無疑矣。故自唐以前劉歆奏王充論衡
趙曄吳越春秋皆以為禹益所著博物志曰太古^ノ古^文今見在^有

神農經。山海經。水經注曰。禹著山經。謀出沮洳。又曰。山海經創之大禹。紀錄遠矣。鄭玄注尚云。股腹注毛氏春秋。皆用山海經。疑此經自杜佑始。云。是期。セにて余が意不適せる。況かり。者不條。小精。き辨あり。此經と詭ひ人必。その校正。本云就て見べし。されど其注を未シモト。多々。まゝ。按。もる。隋書經籍志。漢始。蕭何。得秦。因云。後又得山海經。相傳以為夏禹所記也。と云。る。下。も有り。これ漢代。よ此經の傳は。きる由來。今。その海外東經の全文。本云の次第の隨。子。舉て。説著。近。こ。左。の如。い。で。や。日。む。う。し。大樹の。し。と。れ。神。う。と。ア。四方の木くさの言。ヤ。免。て。聞。リ。

山海經海外東經。云。騫邱。爰。有。遺玉。青馬。視肉。楊桃。甘。袒。耳。

華。甘果。所。生。在。東。海。兩。山。夾。邱。上。有。樹。木。在。堯。葬。東。

本經此文の上。よ標して。海外。自。東。南。陬。至。東。北。陬。者。と。云。ひて。第一。ア。是。騫邱。を。出。セ。リ。在。堯。葬。東。と。云。る。是。東。經。より前。かる。海外南經の。經。リ。よ。狄。山。帝。堯。葬。于。陽。帝。舜。葬。于。陰。と。有。る。山。を。云。乃。き。と。諸。注。よ。其。所。在。詳。か。り。と。され。ど。も。彼。國。少。て。海。内。東。南。と。指。し。る。豫。州。と。中。と。ふ。て。揚。州。と。い。ふ。域。と。謂。ひ。ま。ゝ。海。外。の。東。南。と。指。と。き。は。必。め。が。筑。紫。国。と。謂。ぬ。例。岳。山。と。有。る。郭。注。よ。即。狹。山。也。と。云。り。其。山。よ。立。べ。て。有。申。山。者。太。荒。之。中。有。山。名。曰。天。臺。高。山。海。水。出。焉。と。載。セ。る。山。を。疑。

かく舟山補陀山を云ふと聞え。海水出焉とは灌門海の事
字云ふと聞ひる。是以て如此と思ひ定めたり。但こそ実の
葬所よりは非_レ次_レ郭_レ注_レ。按_レ帝王冢墓皆有定處_レ而山海經往_レ
復見_レ之_レ者益以_レ聖人久於其位仁化廣及_レ至_レ于祖_レ而四海無思
不哀故殊俗之入各起_レ土為冢是_レ以所在有_レ焉示猶漢
氏諸遠郡國皆有_レ天子廟此其遺象也。云々如_レ是邊よ
マ正東の荒外_レ。直徑_レ子推求ひれを海上三百里餘_レよりて。

我が筑紫の薩_レナ国。頴娃郡の海門岬_レと大隅_レ国大隅郡佐多
岬_レの處小至_レ。嵯_レ邱_レと謂ふも疑ふく此如_レかり。そして兩山夾
邱_レとは海門岬_レと佐多岬_レと小夾_レまれて櫻鳴_レあると謂ふと
聞え。由_レ海門岬_レ謂ゆる海門_レが嶽_レなり。此阿_レ小神名式_レ
出_レと。故_レ閨_レ神社_レわり。國史_レ小は閨_レ閨_レと云れ_レ。今此山_レは
といふも、聞聞の字音より称ひ來れる。或_レ此所のさま。
海門_レとも云つべき形_レそれを別_レ子かくも称せる。や。或_レ云

み。海門山。一名空德島。在_レ頴娃郡校_レ邱_レ。云_レへり。上_レ樹木_レ有_レ。云_レ有_レ。櫻_レふ_レ
と謂_レへるも知_レをうり。其_レ嵯_レ邱_レの所_レの畢_レ況_レ。注_レ。淮南
云_レ。彼_レ國_レの東北_レ方_レれ_レ。赤水_レの事をいひて昆侖華_レ邱_レ。在_レ甘東
南_レ。楊桃_レ甘_レ櫟_レ耳_レ。華_レ百果_レ所_レ生_レ。有_レりて。高誘_レ注_レ。皆異物_レ也_レと
有_レるを云_レ。昆侖_レと云_レ。新_レ名_レ。丘_レ一成_レ。旦_レ頓_レ丘_レ再成_レ。陶_レ丘_レ三
成_レ。日_レ昆侖_レト_レわ_レるを思_レふ。昆侖華_レ邱_レと云_レ。聞聞_レの嶽_レを。
薩_レ广富士_レと称_レも。云_レえ思_レひ合_レさる。れ_レで_レ。山海經_レよ
み。本海外此經の末_レ。も平邱_レとて相類_レ。と_レ邱_レ。出_レセ_レ。然
れ_レどそ_レ華_レ邱_レの記傳_レと聞え_レ。さて遺玉青馬以下_レの諸品を注_レせざるは
今_レの考_レ。子_レ乃_レ一_レ要_レれ_レ支_レと_レれ_レも_レ。下_レの條_レても此_レ子_レ準
万_レて知_レをし。

大人国在其_レ北。爲_レ人大坐而削船。奢比_レ之。尸在其_レ北。獸身人
面大耳珥。兩青蛇。

大荒東經。此國を出せる所は。東海之外。大荒之中。有山。名曰。大言。日月所出。有波谷山者。有大人之國。と有り。また大荒人名。曰。大人。有大人之國。釐姓。黍食云々。と有り。も。畢沅。が言ふ。此似叙海外東經大人國也。と云ふ。が如く然みて。釐姓と云ふ。本文の劉歆。が校文。一曰。在。鬱邱。北。と云ふ。然る訛傳か。本文の劉歆。が校文。一曰。在。鬱邱。北。と云ふ。然る子同じ筑紫内。とて。謂ゆる鬱邱の北。す當り。日月の出る所とも言べき大山。も。日向國霧嶋山。あり。されど大人の国とは。此邊を言ひしと聞え。より。また波谷山。とも。謂ゆる法華山。れど。字云々。る本大荒東經。大言山の外。す。日月所出。と云ふ。山。も。合虛。明星。鞠陵。猗天。知。とし。さて郭璞傳。今の本文。小。注。をかす。大荒東經の。有大人之國。と。有。所。按。河団玉版。曰。從昆侖以北九万里。

得龍伯國。身長三十丈。生万八千歲而死。此文を列子張謹。注。引。する。よ。は。長四十丈。従昆侖以東。得大秦人。長十丈。皆衣帛。後此以東十万里。得中秦國。長一丈。穀梁傳。曰。長翟。身橫九畝。載其頭。匈見於軾。卽長數大人也。秦時大人見臨洮。身長五丈。脚跡六尺。準斯以言。則此大人之長短。未可得限度也。と云。守り。まと。晉。永嘉集。於始安縣南。廿里。之鷺。彼中。民周虎。張得之。木夫貲之。銕鍼。其長六尺有半。以箭計之。其射者。人身忘長一丈五六尺也。又平州。別駕。高會。語云。倭國。人嘗得。遺目吹度。大海外。見一國人。皆長丈餘。形狀似胡。蓋是長翟。別種。篲殆。將後此國來也。もし云。今此を考ふる。河団かる龍伯國の事。早く。列子陽向篇の夏草。が語。天帝。の五神山を。禹疆。小命。して。大鼈。小戴。を。より。給へる。と。云。所。龍伯之國。有大人。舉足不盈。

數歩而暨五山之所。一釣而連六鼈合負而輒歸其國。灼其骨以數章。張謨注し。數算計也。以高下周圍三万里。山而一鼈頭負之。又鑽其骨以卜。計此入之形當百餘萬里。鯤鵬方丈。猶蚊蚋螢風耳。則大夏之所受亦矣。所不容哉。云。一鼈頭と有云。一山と三鼈頭。云。載く由れもばかり。そん本文の全文を見る。云。一山と三鼈頭。云。載く由れもばかり。於是岱安員嶠二山。流於北極。沉於大海。仙聖之播遷者。巨億計。帝憑怒侵滅龍伯之國。使泥侵小龍伯之民。使短至伏羲神農時。其国人猶數十丈。と有ると云。るかれど。こそ今の本文の大人は。固より別よして。此よ引出べきとす非文。さるは夏草が些え。是より前小殷湯の物有。巨細半有。修短半有。同異半有。可るよ依りて巨細の別と論。さむ為よ。まづ大鷗の太字説。まづ此龍伯人と僬僥人の長短黒白。下よ及びさて。下よ。鯤鵬の巨大と僬僥の微細とを比論せよ。とて。僬僥人とは。

殊々東方と云れど。龍伯子東方と云ふと思ふべ。斯く是僬僥人を東方と云ふハ。故実わると云フ。とは三五本国考。第三條の附錄と云ふを見て知べし。備この僬僥の本拠。りて。下よ。す。就て思へば。龍伯の説。古傳わりしと云て寓言。云々。非妄されどこそ今。い要らる。と。小國。大秦。中秦。長翟れと。傳説も殊々叶は。文。按。ふ。此を今も。謂。や。南阿賣利加の分内。巴太碁羅須とて。長人の国。ゆ。由。かれは。其傳説。字化れる。小も有るべ。事。巴太碁羅須の事。君。羨。の。來覧。黒言。其見聞。及ばれ。長人の傳説。字集めて。其所見を述。山村。昌永。此。去。増。改。西洋。書。を。數。部。引。きて。精。載。セ。り。よ。古。微。古。の。河。國。玉。版。の。所。云。也。種。く。の。云。よ。リ。長。人の。事。實。字。拾。ひ。て。論。へ。り。俟。等。わ。り。就。て。見。る。べ。備。ま。と。海。内。北。經。り。大人。之。市。在。海。中。と。云。る。年。大荒。東。經。す。有。大人。之。帝。名。曰。大人。之。堂。郭注。赤山。名。形。狀。如。堂。室。正。大人。時。集。會。其。上。作。市。肆。也。

大人跋其上、張其兩臂。跋或作俊。皆古蹲字。莊子曰、跋於會稽。
改正と有るも。山市海市比類小て。然る幽界の時わりて現見

見る物なれば。此も本文とは固より別義なり。彼國よては。

東海邊小て見る由かれど。皇國小ては。東北邊の國々の山
かて。時々見るをわりと聞たり。此を見ざる人々の終を聞
いて往來ふ状を見るをり。或て世々画き傳ふる。山越の
弥陀といふ物か。見成るゝ下り。有りといへり。甚し奇吳の
海市山市の所字合せ考ふべし。かくて今の本文より大人
國在其北云。いと云へる國を淮南子時則訓す。東方之極。自
碣石山過朝鮮貫大人之國。高誘云。碣石在遼西界。海水西畔。
在在其東至日出之次。榑木之地。青土樹木之野。榑木。博焱。皆大
東。東至日出之次。榑木之地也。大

皞句芒之所司者。万二千里。と有る大人之國よて。我が筑紫
國と称ふかり。そん次條よ論ふな俟べし。○奢比之尸在其
北云。郭注よ。神名也。珥以蛇貫耳也とあり。劉歆が校文子
在大人北と大荒東經よ。此事を載せるよは。有神人面大耳
見えたり。大荒東經よ。此事を載せるよは。有神人面大耳
獸耳。兩青蛇。名曰奢比。又有五采之鳥と見えたり。即大人
之國と號れ。一域の北境よ。此神の住める由あり。

君子國在其北。衣冠帶劍食獸。使二大虎在旁。其人好讓不爭。
有薰蕕竹。朝生夕死。虫々在其北。各有兩首。朝陽之谷神
曰天吳。是為水伯。在董之北。兩水間。其為獸也。八首人面八
尾。皆青黃。

君子國と大荒東經アマミシキす。有東口之山。有君子之國。其人衣冠
帶劍。郭注云。亦使虎豹好謙讓也。トナリ。畢沅曰。淮南子云。東
注云。東方木德。仁故有君子之國。說文云。東夷。大人也。夷俗仁者寿。君子不死。之國。孔子曰。道不行。欲之九夷。棄將浮于海。

有以也。彼國より東口之山と指する方位を按する。小肥前肥後の西面よ。筑前筑後。豊前豊後の邊までと云。こゝ開口。然れど此も大概の儀よこそ有も。实よは深く拘るるをきと小非文。然るは大人國。君子國と二教よ別て称せれど。淮南子を始り諸玄子參攷もるよ。实も一國ニ二名を称せる小て。同々筑紫の域内と云ふこと著明也。然れどそと前の筑紫子都アマミシキへる間のとて、山海經の成れる当昔まで。然有りし故に。右の如く記せしかり。然れど神武天

皇以後よ。大人國。君子國と云ふも。都スルて然らば大人之國とも。君子之國とも称せる由來は如何と云ひよ。まづ大人とは。皇國スル。人世スル成ても。九尺一丈計スル。人多く。脛タケの七握八拳ハツハツ。然るも有スル。是。況て神世よ。大人の多うマし事ハシマ。量るべし。又衣冠帶劍エツリして。讓ヨシと好アラフし争タケふ。トかく。嚴然として君子の风ハラハラりしも。皇御孫スルミノミコト。余の都スル。もへる國内カナリかれど。然有スル。こゝ疑ハシマ。されど此はもと皇國の自称カナリ。非也。彼より称せらるスル。其由來を尋ねれど。彼國の古代よ。君王大人スルミノミコトは。皆皇國の神真タマツチの渡ハシマり給へるかる故カナリ。其君師大人の本国スル。其義ハシマをもて号ハシマけし者スルミノミコトあり。そ

天地人の三皇も更れり次る六皇及び太昊氏女媧氏か
トの皇國より出る由も既に春秋全序考すも云へれ
た。豈此皇等の多くらひや神農黃帝少昊顓頊帝喾かどの
聖人ともちも皆已く皇國より出て彼の君師と為れること
三五本国考す倫^リ者其君子國と云ふ称え件の山海經の外
ふを見て知べし。諸其君子國と云ふ稱え件の山海經の外
よし。古く黃帝本行記す鳳凰の至れる事を記せる所す。出^レ
於東方君子之國云々と見え。許慎が說文京房が易傳など
取れる物々然し有りば本淮南子地形訓す東方有君子之
國行記いと古き出來たり。淮南子地形訓す東方有君子之
國。と有る高誘注す東方木德仁故有君子之國其人衣冠帶
劔使二文虎也と云。達吉が校注す按說文解字曰東夷後^ス
之國即^シ與此解同と云る。大^シ大人也夷俗仁仁者壽有君子不先^ス
天性柔順易以道御至有君子不先之國孝云々と有りさて
李文の諸本すも二文虎と有る。後漢書の注す
の餘の云々。此文を引くる子は二文虎とわざ。大抵山海
の餘の云々。此文を引くる子は二文虎とわざ。大抵山海

經の成れる當昔と挿ふ。彼土の海外東す衣冠帶劔して
禮讓ある國也。皇國と除みて有^ルこと無し。是を以て皇朝の
古き學者より三善清行朝臣の意見封事れど其餘の紀文
すも此君子國と云ふを皇國の事と以し。彼国人より直情
するは後までも然称せまさ。そと続日本紀す大宝二年す
マニス。彼國の楚州と云ふ所の人也。皇朝の使人より
見て、渤海東有大倭國謂之君子國人民豐樂礼義敦行^ス。今
看^シ使人僕客^シ不^レ信卒^シ云^カ。アリ。こそ彼國の常人の直
情^ス。言^カ。直^シ。中^シ。多^シ。宦途の族^ス。学^シ。寺^ス
と^シ。強^シ。彼國人よ甚^シ芳^シ。教^シ。小^シ。曲^シ。一^シ。裁^シ。習^シ
を^シ。を^シ。此方の學者の彼土^ス心^シ引^カ。倫^シ却^カ。而^シ其曲言
を思ふ。柳君子と称せる本義^ス。君は君王の義^ス。子^ス
丈夫の通称^ス。大夫を夫子と称する子す同じ。大夫を夫

子と称せよ。古云大抵云うる中。左傳昭公七年九月
の下。孔子と夫子と称せよ。と云る孔疏。小身為大夫。乃称
夫子。此時仲尼未仕。不得称焉。夫子以未仕之時。為仕後之語。
是立明意。尊之而失事実。陳恒未死。言溢亦此類也。と有。子
知。へく。然れど師長を夫子と称する。是。ト。ノ。轉用。セ。語。
師長と夫子と称する。俗の漢學者と。も。漫。云
凡師長。り。が。諾。ひ。居。る。傍。痛。き。と。り。こ。そ。序。れ。れ。も。驚。く
く。倫。ふ。け。て。君子とは。も。と。君王を称する語。か。故。み。民。は
對。し。衆。庶。子。對。し。小。人。は。對。く。云。ること。多。く。り。そ。そ。易。の。大
象。れ。文。す。繫。辭。傳。か。ど。よ。君子と称せる條。を見て。知。を
し。礼記玉藻の鄭注。君子とい。大夫士也。と云すれ。と。大夫

士子称。近。る。と。稍。末。よ。て。此。より。轉。り。て。後。子。は。賢。き。淑。人。と
云。ふ。称。と。は。為。れ。ど。そ。そ。論。語。よ。孔子の君子と称せる條。
十。子。セ。八。と。王。公。侯。族。小。当。る。と。其。二。三。と。賢。者。子。云。る。と。孟
子。子。至。り。て。其。方。子。專。と。云。ふ。言。と。為。ど。る。と。以。て。知。へ。し。漢
來唐宋までの儒者の注疏。とも。よ。さ。る。淑。人。を。君。子。と。称。し
て。の。本。美。字。說。得。と。云。解。見。そ。故。是。を。以。て。煩。い。き。所。為。
子。は。有。れ。と。經。出。及。ひ。諸。子。と。君。子。と。称。し。る。句。を。摘。い。章。字
擇。ね。て。か。く。を。定。め。つ。近。く。え。荀。子。王。制。篇。小。天。地。生。君。子。若
子。則。天。地。不。利。礼。義。無。統。上。無。君。師。下。無。父。母。云。く。と。云。ふ。と
始。わ。君。王。と。云。へ。る。こ。と。甚。多く。賢。人。子。称。せ。る。も。亦。計。ふ。る
よ。暇。わ。り。く。猶。別。子。著。を。孔子。聖。說。考。云。ふ。と。俟。べ。一
又。大。人。國。と。云。へ。る。義。皇。國。よ。り。渡。り。給。へ。る。神。聖。と。ち。緯
云。と。も。小。伏。羲。氏。九。尺。一。寸。神。農。氏。八。尺。有。七。寸。黃。帝。氏。身

逾九尺れと有ることく。彼国人よりも丈高^{タリ}し故す。其國人^トの丈短^{タリ}小合^セて称^セる^ケ本^シて。其德^モ叶^カて称^セりと聞^カ。彼國の古尺も我が曲尺の七寸五分^モ当^ス。され^ムこそ是^モ小人^ト對^シ。民庶^ト對^シ。君師^トも入^ト称^カれ^ム。易^{ハシ}の文言傳^ス。夫大人者^ト天地^ト合^セ其德^ト。与日月合^セ其明^ト。与四時合^セ其序^ト。与鬼神合^セ其吉^ト。先天^ト而天弗^違後^テ天^ト而奉^ス天時^ト。天且^ハ弗^違而况^ハ於人乎[。]况^ハ於鬼神乎[。]と見え。荀子解弊篇^ニ。明參^ニ日月^ト大滿^ト八極^ト。夫是^ハ謂大人^トあるも是^ハ美^{ナリ}。また孔子家語^ニ。今^ハの文言傳^ト。月爻^ト。大人^トの二字の聖人^ト。周易^ト。利見^{ハシ}大人^ト云^{ハシ}る語^トの許多^ト。かろと易れる孔語^ト。周易^ト。利見^{ハシ}大人^ト云^{ハシ}る語^トの許多^ト。乾鑿度^ト。孔子曰^{ハシ}。易^{ハシ}有^{ハシ}君人^ト五號也[。]と云^{ハシ}る語中^ニ。大人者^ト

聖人^ト在位^ル者也[。]と見え。孟子離婁篇^ニ。趙注^ス大人^ト謂君也[。]と有^{ハシ}ると相發^{ハシ}て弁ふべし。小人^ト云ふも。君子^ト對^シて^トも自己^トから威儀^ト。礼儀^トありて正^ト。是^ハ謂大人^トあるも。又^ハ民庶^トそれ^ト反^ヒれる行^{ハシ}る故^ハ。まゝ轉^{ハシ}て惣^ト其行^{ハシ}ひり好^{ハシ}うちね。者^ハ大人君子^ト。君子^ト對^シて。博^{ハシ}く小人^トといふ下^トとも成^{ハシ}れり。大人君子^トはもと君王^トより^ト。是^ハ同^ジ。と^シ警^{ハシ}へは坊舎^の主^ト。貴人の僧形^ト。主^ト。坊主^ト云ふより轉^{ハシ}りて。今^ハ世子^ト田頭^ト。人^トを。總^{ハシ}て坊主^トいふ。を頭^ト。よ髮^ト。有^{ハシ}。そ^シ。田頭^ト。者^ハ為^{ハシ}へき職^ト。され^{ハシ}。今^ハの本文^ト。大人君子^ト。國名^ト。二^ト別^{ハシ}とれど。唯一域^ニ二^ト名^トを称^セる者^ハれること。君子^ト大人^トも称^セし。大人^トはもと君王^トのと^シ。思^{ハシ}ひ合^{ハシ}せて知^{ハシ}べし。斯^{ハシ}て其大人國^ト云^{ハシ}る文^ト。為^{ハシ}入^{ハシ}大坐^ト而削^{ハシ}船^ト云^{ハシ}。君子^ト國^ト云^{ハシ}る文^ト。使^{ハシ}二大虎

在旁ノと有るは。此經の古図ノ。又ク画スて有リる由れり。そ
畢流ゲ校正ミ云スる如く。凡て是經、南山、西山、北山、東山、中山
の五篇ノ。實子伯禹の古紀れるが、海外以下ノ本經ノ附
けて傳スし。海外山川、人物等の圖ノ有ルる。周代の人々
の圖ノ古從ニ集記セし。何カかるを後モその圖ノ失セて
文ムのニ存レるをり。故テその意ヲ得テ見シメた解シ得り
之ヲ古文トも多クり。今ニ二爻モ即チ其ノ行ムからリ。坐リ而削船ヲ
之ヲ其ノ古圖ニ。大人ハれる状ヲ示ス。ひと為フ画スり。而削船ヲ便
ニ大虎在在ノ。大人ハれる状ヲ示ス。君子ノ勢ムその使フニ大
虎ヲ画スる由リ。次テの文ノ。是モ准ムべきトと有リ。さて和漢の古人ニ比君子ノ
國ニ皇國ノ事ト為スる。升訛長秀ハ論ス。我ク國ニて。虎ヲ
使フと々く。薰華サも無レ。皇國ノ事ヲらシと言フれ
とコも頑カる說ナ。そん為フ人ト云フ。衣冠帶タケ好ラ。讓ナ
爭ト有ルは。竪タての風ヲ。虎ヲ使フと有ルは。竪タての風ヲ

謂フニ非文ニ是ニ以テ大荒東經ト。君子ニ國ニ。其人衣冠帶
剝タのニ有リて。餘事ヲ記ス。又後ハ小ニ然ルと云フ。而
神世ノ多クうる神等ノ中ニ。韓國ヨリ虎ヲ生捕リ來テ畜ヒ
馴シ使フりカる。其ノ有ムも何カ疑ハむ。彼所ノ僕人等ニ
も。然ル倫多カ。れハ。神世ニ然ルと云フ。ヘクラ。古シ。臣ツ
巴提ハ使フ。虎ヲ手捕リ。舌ヲ抜ク。而踏殺シ。豐臣ト大臣ニ
時ニ韓國より生捕リ來テ。虎ノ當時ノ益易男アシタガ。り。云ニ
て恐リ。之ヲ記錄ス。また薰華サ。云ニ。言フれど。薰
は莖ニの。保字ト。木槿ト。著シ。是モ山ニも里ニも。叢
生シる物ヲ。而ハ。薰ノ誤ル。由ミ。郭注ニ。薰或作莖。と見
夏文月木槿榮ト。詩ニ。顏如舜華ト。即チ莖也。本草謂フ。朝開暮落花
薰カ。莖無疑ト。云ヘ。但シ此モ其苗ノ朝ニ生シ。而ハ夕ニ枯

○由^ミ生^ミ非^シ其^ノ花^ノ朝^ニ開^カテ暮^ニ落^スト云^フリ。○後^ニ從^シ郭^ヲ出^セリ。玄中記^ヲ見^レル君子之國地方千里多^ニ木槿花^ト有^リ。且^ト張華^タ博物志^ヲ有^リ。君子國人衣冠帶^ヲ綏使^シ兩^ノ鬼^ノ民^ノ衣^ヲ野絲^{好^メ}禮儀不^{争^ハ}上千里多^ニ薰華之草^{好^メ}禮儀故^ニ為^シ君子國^ト○垂^テ在^リ其^ノ北谷有^リ兩首^ノ是^ノ郭注^ヨ金音虹^ト也。見^えリ。

虹端棟也とも有れど虹を司る神を謂ふと聞カ。○朝陽之谷神曰天吳是^ニ水伯^ト云^ハ大荒東經^ニ有^リ夏州之國^ニ蓋余之國^ニ有^リ神人八首人面虎身十尾名曰天吳^ト有^リ夏州之國蓋余之國^ニも有^リ筑紫内^ノ小地名^トも聞^カれども詳^シカ。天吳の居所^ニ朝陽之谷^ト云^ハ有^リ兩水間^ト云^ハる字接^{アタマ}ふ。豈後國佐加開^ト伊豫國三堵^トれ間^ニ有^リ詳^シと謂ふ。其^ノ此邊^ニはも南子大洋^ハり。北子内海^ハり。兩水^ニ間^レれど

所^レかれどあり。後^ニ生^ミ田^ノ國秀^ニて云^ハらくも。朝陽月^所出^ルども云^ハる谷^ノ湯谷^ト朝^字の添^ハりし日^{アタマ}此^ノ邊^ニより内海^ニれど其^ノ谷^ト中子^トて^ミらふ^{サク}兩水間^ト云^ハむも難^シく^ベく^ヤ但^一此^ノ文^ノ繞^ツ青邱^ノ國^ニと隔^テ黒齒國^ノ下^ニ有^リ湯谷^ト重複^セれど其^ハ豈^シこれ^ノいふらうや此^ノ經^九重複^の多^ニれどか^シく^ム朝陽之谷即^チ湯谷^ニ見^レ方穂^ノ待^ラド^トト所^レ合^セ考^フべ

青邱^ノ國^ニ在^リ其^ノ狹四足九尾帝^ニ命^シ豎^カ步^セ自^リ東極^ニ至^リ千西

極^ニ

五億十巡^ト九千八百步豎^カ右^手把^シ箒^ヲ左^手指^ス青邱^ノ北

青邱^ノ國^トは東方朔^タ十州記^ニ長州^ニ一名^シ青邱^ト在^リ南海辰巳之地上饒^ス山川又多^ニ大樹乃^ハ有^リ二千圍^ハ者一州之上專^シ是林木故^ニ一名^シ青邱^ト又有^リ仙草靈茱甘液玉英靡^レ所^レ不^有る又有^リ凡^ス山^ノ山

恒震声有紫府宮。天真仙女。遊於北地。有長州是あり。但
之文。南海と有る。東南とわりし東。享化落するあり。
そく何を以て知ると言ひ。廣黃帝本行記。東到青丘。見
紫府先生。登於風山。受三皇內文。天爻大字云々。呂氏春秋。小
青岳東至鳥谷青邱之鄉。また清臺真人傳。乃遊行天下。東到
青丘。遇谷希子。云々。有りて一向子東方と指す。辰
巳之地と云ふ。子相合せて辨ふべし。即ち徐州の東南海
又。なほ青丘と東方海外と为せる諸
虫の傳説多きれど尽く引出さば。然らば其青邱とは何
處か。かると言ふ。大人君子は國の北に在る由をれば筑紫
の北面。火國。豐國を本す。四國木國。乃より迄と廣く指す。

又と聞か。そは長州と云ふ。号も由有りて。閔え。その青邱と
いふ名也。正す大樹の繁茂せる故の名あると。大國。又。東
南。木國。小至るまで。神世のやうは殊。又。大樹の茂れる所思
い合され。かつ十州記す。其域内。有風山。山恒震声と有る
也。伊豫国。子風早郡。あり。烈風。わる所。ある。子相符ひて。閔
れを。あり。其大樹。と。もの。と。て。角九條の末。子。尽く。引出。ると
谷希子。又。三皇內文。といふ物の。それ。ども。本編。さて。其。狐
赤鱵太古傳。の。三皇紀。子。委く。いふ。と。みる。でし。
四足九尾也。大荒東經。有。青邱之國。有。狐九尾。と。云。と。郭注
云。大平則。出。而。為。瑞。也。と。なり。然る。子。海内南山經。有。青邱
之山。其陽多玉。其陰多青。腹。有。獸。其。狀。如。狐。而。九尾。其。音。如。

嬰兒能食人食者不盡とあるハ別事て乃アシ本文の青邱と云
ふ名を海内アシ移せられり。こそ本文の。眞の九尾狐なる
を。南山経れるハ。狐す如く。獸れ九尾をすが住りる故也。
姑狛ハナクマと称せるからむ。凡て彼國の地名す此山の名の。これ
し。そえよる地名の。さて帝タケミカツチ命豎亥云ては。山海經も更す
出る処。いふ云べし。さて帝タケミカツチ命豎亥云ては。山海經も更す
佗の古云すても。斯の如文正に打任せし帝と称せるハ。多
く天皇太帝と指せり。然るす此條の劉歆が比較する。一曰、
禹令豎亥云々と有り。淮南子すも禹と有ると黄帝本行記
す。乃黄帝のとと為シカ。今何と是とも思ひ定め難し。此
る本後生の考シカ。さて其謂である東極也。天皇太帝の世ヨリは始
接す俟シカ。而して其謂である東極也。天皇太帝の世ヨリは始
り

給ふ時よ。大地の四正す立あひし謂イハする四極の第一す。
岳瀆名山記す。東岳廣桑山。在東海中。青帝所都スルと有る域トコロを
いひて。此も神典す。伊邪那岐イザナギ大神の。自礮嶋カノコロニキ。アノミシテモジラ
立あひしト有る御弟エホコの化シテる山即チ是カリ淮南子地形訓
之山アシ。開明之門カノコロニキと有る高傍注す。曰之所生也。故曰。東極
開明。と云ふ。し此山なり。れ不本編み。字シテを。此山今
現小路。國す屬文スル。其西北隅す在るを。此所す立ちて西
小向ハナカ。青邱カク。阿波アハ。伊予イヒ。豐前ヒビ。筑前シム。肥前ヒタチ。皆其左手
尔指シカ。斯て下文す。謂ゆる陽谷也。此山より正西す當シカ
て程近シカ。内海す在り。然きハ。此内海の所す豎亥と居シカ。も
て。四方の極より極シカ至る。里程字推歩セシカ。も。由取シカ。

歩ニ畢沅クが注す。鄭君注尚云大傳云。步推也。高誘注淮南子云。善行人误矣。ト云へるる理トする言かり。されど推歩リ歩シル子出ストの語かること。已別カノレコト。右手把算左手指青邱北ノとは小考ハわれど此よも漏シテ。右手把算左手指青邱北ノとは乃豎矣。圖象の有状を謂す。諸本子算と算子誤れり。今は畢沅が校本子拵りて改りつ。算ハ說文子。長六寸。計歷數者从竹弄。言常弄乃不誤也。トわり。歷象測量ノトマト。我が是子ハテ其端倪ヨリを知スベシ。此事委シく。三唐由來記子謬ミスする字見スベシ。

黑齒國在北ノ為入黑齒食稻啖蛇ヲ赤一青ヲ在其旁ノ下ニ有陽谷十日所浴。陽谷上有扶桑有黑齒北居水中ニ有大木。九日居下枝。一日居上枝。雨師妾在其北。其為人黑兩手各操

一蛇左耳有青蛇。右耳有赤蛇。

大荒東經云。有黑齒之國。帝俊生黑齒郭注。齒如漆也。聖人神化無方。故其後世所降育名有殊類。異狀乏人。諸言生ト者多謂其苗裔。未必是親所產。姜姓黍食使四鳥。トわ。有其北云。ては。青邱サキの北子。豎亥の等子把りて西子向ひ。左手小青邱と指す。其北子此国子重文具所。子黑齒。若人字画。其傍小二蛇。字画漆。一赤蛇。一青蛇。赤蛇。字画。黑齒之国とは。乃黑齒の生国と謂ふ。如し。帝俊とハ帝喾高辛氏の一名。前子は郭注子。俊亦舜字假借音也。ト云。字子依りて。虞舜の事と為ス。も悪ウ也。記云。路定高辛紀云。帝王世紀を引ききて。帝喾生而神異。自言其名曰。爻山海經作俊。言帝俊如甚。多皆謂喾。郭注皆以

為舜謂舜後裔相近失所考矣といひ畢沅が山海經の注より徐文靖が竹書紀年の統纂も略大と同説にて共にする。されりさて黒齒也郭注より齒如漆也聖人神化無方故其所降育多有殊類異状之人と云ふ子依れも其国人まれ黒齒かりと謂ふ子は非也此一人の生子に其齒の黒文故乎是名を負ふと聞えたり。但し郭注より諸言生者多々謂其處の先輩ら多く此説子依れと云ふと彼こそ帝堯の親産なること疑なしさて本文より入黒齒食稻吟蛇と有る小就て臆後わり。そは何也リひ書名を忘れたり。彼国籍子食稻者遠白食禾者遠黑と云ふ語の有れ也。此人稻は食子と齒の黒文意りあく若くも好んで蛇を食ひ一故乎蛇毒と解せむと鐵檻もて常小齒を染て枉りし

も亦知へりら文。されど上の郭注より聖人神化無方云々と云ふ子也れど予が今之説は之を強言れど何れ子佐るとも其國もべて其が人なりといふに非也帝俊の親産セヨ一人の黒齒をりしてハ論り多くかひ下より引く呂氏春秋黒齒之國ト有る所の高滂注より東方其人甚黒因曰黒齒之國ト云ふ。山海經の文とよく察さる誤る。さて下有陽谷。陽谷上有扶桑トハ黒齒國の國より下小湯谷の國と書き。其湯谷の上より扶桑国字重ねる由ある當然の云ひでも黒齒の湯谷の上より異名同姓の如く聞ゆる故乎。又在黑齒北居水中在大木といひて共子湯谷の上より有き。其別の各別する由と示せるあり。こゝ古人の文辭の丁寧深切か故是方位説小なり。呂氏春秋所なり心を潛りて視るへし故是方位説小なり。呂氏春秋求人篇より禹東至榑木之地日出九津青差之野島谷青丘

之郷。黒遜之国。高秀注搏杰大木也。津崖也。淮南子曰。出_ト陽谷
國_ト增注搏_ト有_リ木也。有_リ字照し合て其所在を索ひる。先謂也
木郎技木也。有_リ字照し合て其所在を索ひる。先謂也
有_リ青邱也。既小いふことく筑紫の北面する豊國と本と云
て。其東西の国と指こと疑ひ無れど此豊國の北す。黒
遜國は当る一諸を索むる。豊後の国崎の東郡伊波比洋
の西南す。今現ニ姫嶋と称する嶋あり。古ニ神典子ニ柱神
已ニ大八嶋國を次て小生ゆひ然後_ト。又六嶋を生ゆひ
シ中ニ女嶋示名。謂天一根と有_リ嶋あり。黒遜之国ハ疑な
く是也。前ニ是技_ト國考と草稿セ一時_ト此國の所在を
未思ひ得もて。我_ク南海_ト在る島國の名より_{シテ}
傳_ト引きて。倭國東四千里有_リ裸國。裸國東南有_リ黑遜國。船行
一年可_リ至_ル也。と云へれど本文_ト扶桑有_リ黑遜北_ト云ひ。諸云
小扶桑ハ彼國の東海外子在リ。日の出_ト所と云ふ。右呂氏の文も更
合_トされば此は荒唐至_ル極_トの妄設_ト。此は荒唐至_ル極_トの妄設_ト。其と此姫嶋の下_ト。豊前國企救郡_ト
属_トる速鞆の端門也。こそ神典_ト。伊邪那岐大神。豫美都
國の穢惡_ト濯除_ト。乃_ト往見栗門及速吸名門。然此
二門_ト。潮既太急故還向於橘之小門而拂濯_ト。有_リ速吸門
かて是疑_ト。是湯谷れり。さるも其所在。本文_ト小黑遜下_ト在_ト湯
谷_ト云_ト。小符合_トは_リ。但_ト神典_トの速吸門_ト。女嶋
詳_ト考_ト。得_トられざりし_ト速鞆の端門_ト。師_トの古事記傳_ト。
事_ト。小倉の殿_ト西田直養_ト。いふ入_ト歸_ト考_ト。速吸門考_ト

といふ物を云々。女嶋の事も豊後の狩築の殿人小串、室威
といふ人よく考へて、姫嶋考と云ふ物と記せり。其二説ト
も古史傳より本編に出せられ。さて呂氏春秋云。日出九津
と云ふは即本文の湯谷なり。此谷もしも本編三皇紀及び
三五本國考といふ如く。黃帝云小謂つる谷神不祀。玄紀之
門天地之根老子の謂つる百谷王。列子云謂つる大壑無底
之谷れる。多く此云甘潤とも称す。そは大荒南經云。東南
海之外。甘木之間。有羌和乏國。有女子名曰羌和。為帝俊之妻。
生十日。常浴。曰。千日潤。と有る是たり。此文今の諸本。誤字
ミ引くる文と抜合。義和乏国とは。羌和の本国と云フ意の称
して引くる。又云。ここは羌和乏國ともいふ。そは大荒東經云。東海
かう。又云。ここは羌和乏國ともいふ。そは大荒東經云。東海

之外大壑。羌和之國。羌和。孺帝顓頊。示比棄。其琴瑟。有甘山者。
甘水出焉。生甘潤。と有る是小て。こそ羌和の生國と云ふが
如し。此國の產ふる。故云。羌和。也。此國子て生れ。かり
顓頊。黄帝の曾孫。小て五帝の弟。黄帝の子。かり。黄帝乃
云。生れ。り。ど。此國小在。も。故。云。羌和。也。此。西蜀の地
曾孫。子て。唐堯の養父。云。此。國。も。生。り。帝俊。も。黄帝の
孫。り。委。く。も。三五本國考。と。云。て。生。り。大荒南經の
文。云。羌和。生。十。日。と。有。る。郭注。云。生。十。子。各。以。日。名。名。之。
故。言。生。十。日。數。十。也。と。云。る。は。然。る。言。み。て。日。名。と。は。甲。乙。丙
丁等の十子。とい。言。こ。そ。も。ト。太。異。氏。の。日。數。の。名。不。用。ひ。ひ
料。少。作。り。か。ひ。一。物。を。る。を。羌。和。の。生。る。十。子。の。名。を。命。く
る。由。か。り。そ。る。大。荒。西。經。云。帝。俊。妻。常。美。生。月。十。有。二。此。始。浴。
之。と。わ。る。注。子。羌。与。羌。和。浴。日。同。とい。ひ。海。内。經。云。

共工生后土后士住喧鳴嗚生歲十有二有注子生常
十二子皆以歲名之故云然と云も皆同じ例か
浴曰于甘潤とは十子と以て名けし子等を常小そとの間分

る甘潤も浴セトケテ育養せるといふ。乃本爻も黒齒下有
湯谷十日所浴と有るが相照れ也。甘潤と謂ふも。乃
湯谷の別名。美和之国といふも即黒齒之国。あくサムの國
かること。甚明小知らむ。これもこは一諸子もて。三名
と称せらる。それど其レバ彼より称セト名カア実も神
典子谓カア女鳴ふること。止ムイムゲ如し此國よかく三
は譬へ。孰の國子汝れ同國の産ふる人三人あると。其國
を云と。某麻呂ガ國とも。某子ノ國とも。何彦ノ國とも
云。こゝ有るが如くこゝも黒齒タ生國美和の
本国サムの生國と謂ふ子曰く。知るべし。柳星鳴を姫

鳴トシモいふ由も。神興も出する昔語よ。新羅國子也。阿具
詔ちふ詔の邊子一賤女晝寢しれる。日耀虹の如く。その
会子指すと一賤夫その状子吳シト思ひて恒子其女の
行ひと伺ふ。此女その時より妊シテ赤玉を射ひ生れる。
三五。本国考子引く。諸玄子。サムの母女節り。大星虹の如
く下れる。妻嫁してサムを娘ニ。顙頷の母女樞の珍光虹
の如く。其宮子入れ。感して顙頷子虹。有る。星
と云ふ。耀れる。故の文子。て実。此賤女の会門を推す。日
耀子曰く。是を謂カア天根玄牡の氣勢あり。そも彼
第七條の注。湯谷咸池の名美を説く。所子いふを見べし。彼
賤夫その玉を乞取りて。恒子裏にて腰子著れる。後よ由
りて。其國主の子子幣と為なり。然る子國主の子。その玉
を床邊小置しきは。即義麗文娘子子化りぬ。茲小妻と為し

て在れる。其娘子常小種ウツノ珍物タツモノを設セりて。其丈ラ小進スめ
は。夫の心奢コロガシりて。妻を置マレし。吾アガも汝イシの妻メを為ナル。女
非ミテりば。吾祖アガの國クニを行ひといひて。竊シヌひて小船コブチを乘スりて
逃遁ミクニれ。皇國カニを來れ。比賣語曾神ヒメコソノと為スれる。モシミ瓦。
このトハ古事記忘ミタマシ神天皇殿ミタマシノミコト日本紀の垂仁天皇紀の一
出ミテト。載スられ。是傳ミタマシの趣異ミタマシ。日本紀の垂仁天皇紀の一
知ルべし。摂津國シヅクニ瓦土記タケトキ。日本紀と併シテセ考スふ。其始
りて著ツキる处トコ。豊國ヨコクニの國前郡クニサト伊波比イハビの比賣鳴ヒメニ有
きて。此乃二柱ツキ神の生ウタハへ。女鳴示名ウタハニカミは天一根ヒタチツチとある鳴
小コトハ北ヒツシ比賣鳴ヒメニカミといふ。是比賣神の來り住リらる故カリ
といふ說シテ。誠マサニ思ム。トとは思ム。物モノ。比ヒハ入リ世セと成ス

て後の故事コトかると想ム。是より古く美和の住リる由縁
すよアテ。神世よりしてふう号フルけ來れるも亦知ベクらば。
そも美和ミハといふ。彼國カニ傳ヘシ。漢名カニ。有リれ。實シ。皇
國カニの女神ミタマシ。有リれば。北方ヒツシと称セる名メ。別シ。有リひて
いふ。更シテ。此コトハ。小串ヒツシ。童威タマシ。姫鳴考ヒメニカミ。こそ彼比賣神の
其夫ヒツシ。遁ミクニれて來リ。住リる鳴ヒメニカミ。今は赤水明神アカミツノミコト。而シテ此
女神ミタマシ。祭スル。其神體ミタマシノミコト木像キイダコ。婦人の筆ヒメノヒを持チ。塗スル漆ウラジ
ひス。客ゲれり。こと赤水明神アカミツノミコト。白シロ由ユも。其社カニの在リ。岩下イシヤマよ
ア。赤アカ錆カタマリ。骨カルミス。水ミズがリれ出て。手ハを拍ハシキ。簪カトリを忘ミタマシ。逆シテ
故シテ。柏子水アカサカミズと名スル。土人ヒトコト。明神ミタマシの靈水ミツミズれり。と言フ。記
せり。こそ黒巖クマヤマ国カニともいへ。故事コト。よくも符シテ。実蹟シテ。

どうし。また姫嶋考。俗説よ。此比賣神といふを、真野の長
神の灵水たりと云ふより。古くを知りぬ者の櫻木神像を銚
銚く形より造りたてて、銚當つけ石、揚子桺れども事をも
設け出で、名所の證とせし物なり。さるも遠を染ひとも。我
ク國中古より比夙儀をれども上代子ハヨリとかられば、後
人の所為かること、疑かしと記せる字已も前も諾ひ
これと今思へば、真野の長者、女のも非かれと、黒遠國
と名けして、此皇水の固有り有りし由縁よりて、美和モ
彼黒遠も帝俊の子かれど、凡常の戎人の種族からば、寔も
大國主神の遠りうり御裔をれど、固より神であく好いて
遠を潔りむ因縁子よりて、さる靈水の佛^{ツル}にて神典よ。此嶋
出て、今子至れる実迹かるも知べからば。以て神典よ。此嶋
の亦名と。天一振と謂へる名矣。壹岐嶋の亦名と。天一柱
と有るも。海中小離れて、一わる嶋れる故の名あれ。天一
根と云ふも。さる美の名やとも思す。此嶋大塹湯谷の

傍ノハ小在る嶋かる故よ。やがて此字国名とて。大塹、少昊之
國とも。人皇氏また羲和の子等と。出于^{コトハ}湯谷とも云ふ。亦
れ玄牝天地根れる小想ひ合それ。ニ柱御祖神のさる
逃契ユヨシをして。名けらへるも亦知べりらば。そもそもて國との
考ふるよ。其本名トタトるが却りて後名ト亦名といふ名
トニ柱神の當者号^{ハシタ}名すると思ふ。由も既よ古史
傳小論へれど、今更柳^{シロ}の比賣語曾^{アマ}神の吾祖の國^{ミタ}行ひ
て。此嶋^{シマ}來れるとも。即説よ。皇國^{ヒノカホ}日大御神の御生ま
せる本国^{カム}が故れり。と言れば然る説かれど。尚按ふ
小天日^{ノハ}の御國^{アタリ}。もと此より判りし物かる。況てそと所
治者^{ハシタ}大御神。この近支間ある橋之小門^{アレ}にて生坐せる故

よ。祖国とは云ふふて、そる祖の本国といふが如しここ本
く記せるが、其概畧
ん下とも云々べし。さて速吸門とる湯谷の上姫嶋とる黒
嶋の北す在りて。水中より居しと言へは扶桑國とは長門周
防小続りる。大倭豐秋津嶋オホヤマトヨアキツシマは總称し名れること著く。有
有大木と云ふえ。即謂ひる扶桑木ねること言ふも更れり。
大倭豐秋津嶋もニ柱神の生ませる國の多々の中子も。國
の長子かる故よや有ひ。わざし嶋ツカシマで小勝れる大州オオシマにて。西
之長門の豊浦郡より東て陸奥の津経南部の端ハタケより至りて。西
一連ヒトドリよ長大ヒロコトコト成し国かること既ハシモツ古史傳コトハシモツ如シモツかれ
ぞ、扶桑國オホヤマコトコト都ハタケ此邊ツカシマ併ハタケし。その扶桑大樹の下枝シモツナノ九日
まハシモツてゑハシモツるハシモツ心得べし。居り。上杖カミツエナノ一日居ハシモツと謂ふとの由ハシモツ。う、小言トコロむと紛は
し紀事ハシモツとも有れど。第七條ハシモツの下より説くと俟へし。兩師ツカシマ妻ツカシマ

在其北云々は郭注。兩師ツカシマ謂屏翳也ツカシマト有り。初學記。兩師
曰屏翳亦曰屏号とも云へり。雨と司る神の漢名あり。凡俗
玄冥ツカシマ為雨師ツカシマト。妻ツカシマと云子は其女神ツカシマよや有ひ。劉歆ルイシが校文カウモン
も見えたり。妻ツカシマと云子は其女神ツカシマよや有ひ。劉歆ルイシが校文カウモン
は。為入黑身入而各操一龜ツカシマト。傍上件奢比之。尸。蚩ツカシマ天
吳。九尾狐。この兩師妻ツカシマれども更ふり。山海經中ツカシマ。云々種ツカシマ
の神物ツカシマどもの現形せる由ツカシマと載せるも。大荒西經の顕頊令
重獻ツカシマ上天ツカシマ令黎ツカシマ仰ツカシマ下地ツカシマト。わる所の郭璞注。古者人神雜擾ツカシマ不可放
物ツカシマ云々と有る如く。當昔未頭幽ツカシマの間分ツカシマレクらば。右の類
れる神物ツカシマか不人ツカシマ形と隱ツカシマるも有しき。列子陽問篇夏
草ツカシマが語ツカシマ。覲鵬ツカシマ

かどにてないひて、世豈知有此物哉。大禹行而見之伯シカ益知而名ナニ之夷堅閑而志ス之シと有るとも思ひ分ばざ。然る
ニ漸く子神物は人を避ひて、世ニ現形せば成ぬると。頭逃
別りしといふ。こそ我ク神典ハても、其趣詳シ知られム。今
但し今は其現形ハきと以て、然る物ハとれ思ひそよ。今
も昔小替ハねと。隐身シテ在るが故シ人常ハ見るトれま
ねり。四年よ富士山の焼出ハトミ前ミの幕カ了村内
指シのトき見れど、有ゆる諸獸打群ハテ去ル行く趣シなシ中
ミ。此山の獸王ハ見カる大キかる獸の總身ハ目ハるが諸獸
ミ圍繞ハセられて立退ハく字見シりシ其後ハとモ無シく山
の焼出ハ泥砂ハ吹立ハる。謂ハる宝永山ハ出來シと云
う。正月六日雪の零リる日ハ、井川村ト云フ。腰越村ト云フ
テ、其道三里の間ハの道ハ巨人的足迹ハわリ。長一尺八寸、幅
八寸一步の間ハ一丈不トつト有り。腰越村の入口ハ足わ
ト消シり。此村の者ハ巨人ハ見カるなり。裸躰ハて、其膏
は軒シタより上アツ出シたりシとシて、こそ其村の名主次郎兵衛ト
いふ者ハ新庄道雄ト云フ。語ハて語ハて、記セりシ。如シ
物ハも今ハ常ハ現見シることなく、隐身シテ在レど時ハ
ス現シるトも有リ。古シ今ハ現シひシ。是ハ有リ。今
ト然シるト非シざル。とおへシか、了類ハトシ。博
数ハ有リ。然シのトも
此ハ記シく出シさケ。

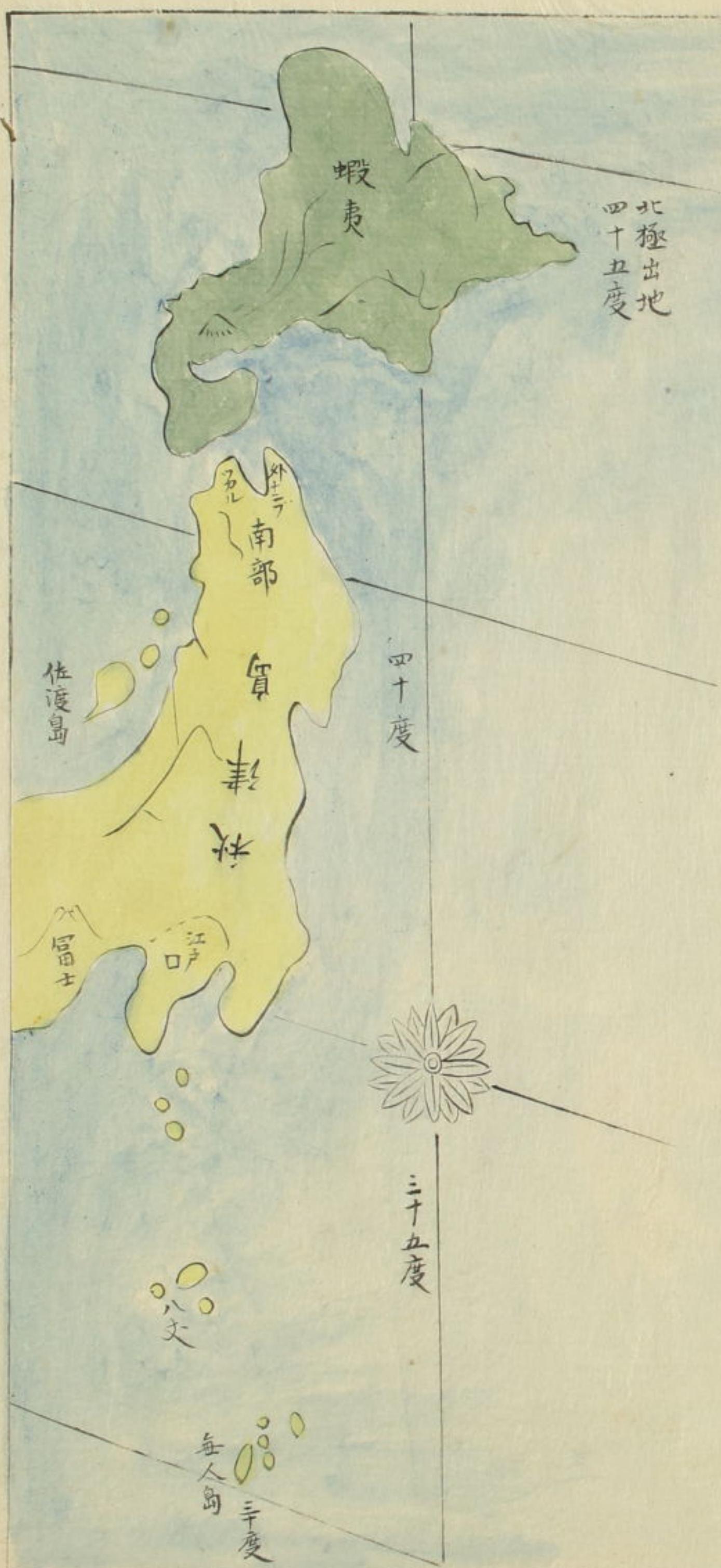
玄股ハ之國ハ在其シ北ハ。其ハ爲シ人ト衣ト魚ト食シ。驅使シ兩鳥ト交シ之シ毛民ト之國ト。

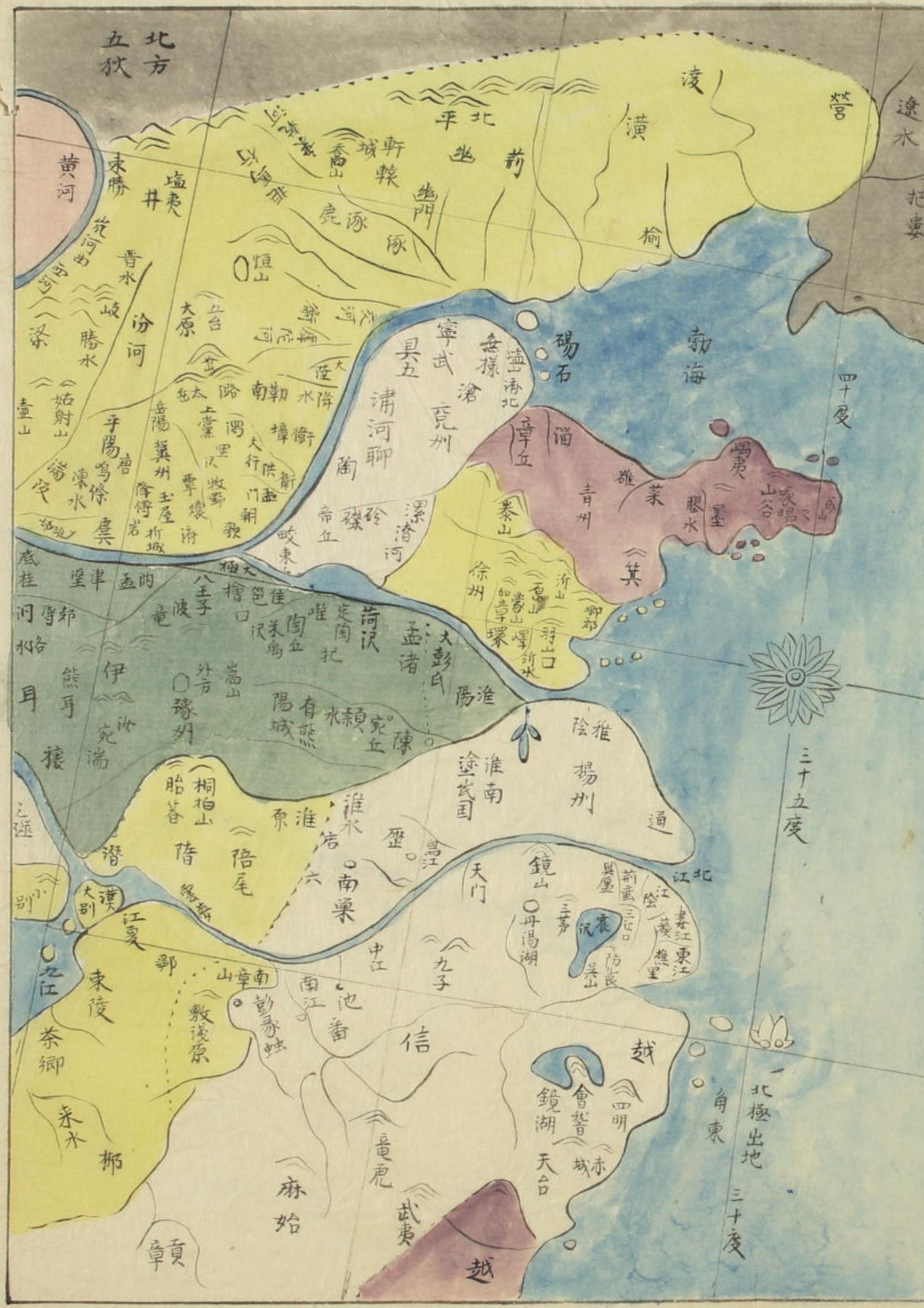
在其シ北ハ爲シ人身ト生シ毛勞民ト之國ト。在其シ北ハ其ハ爲シ人ト黑ト。

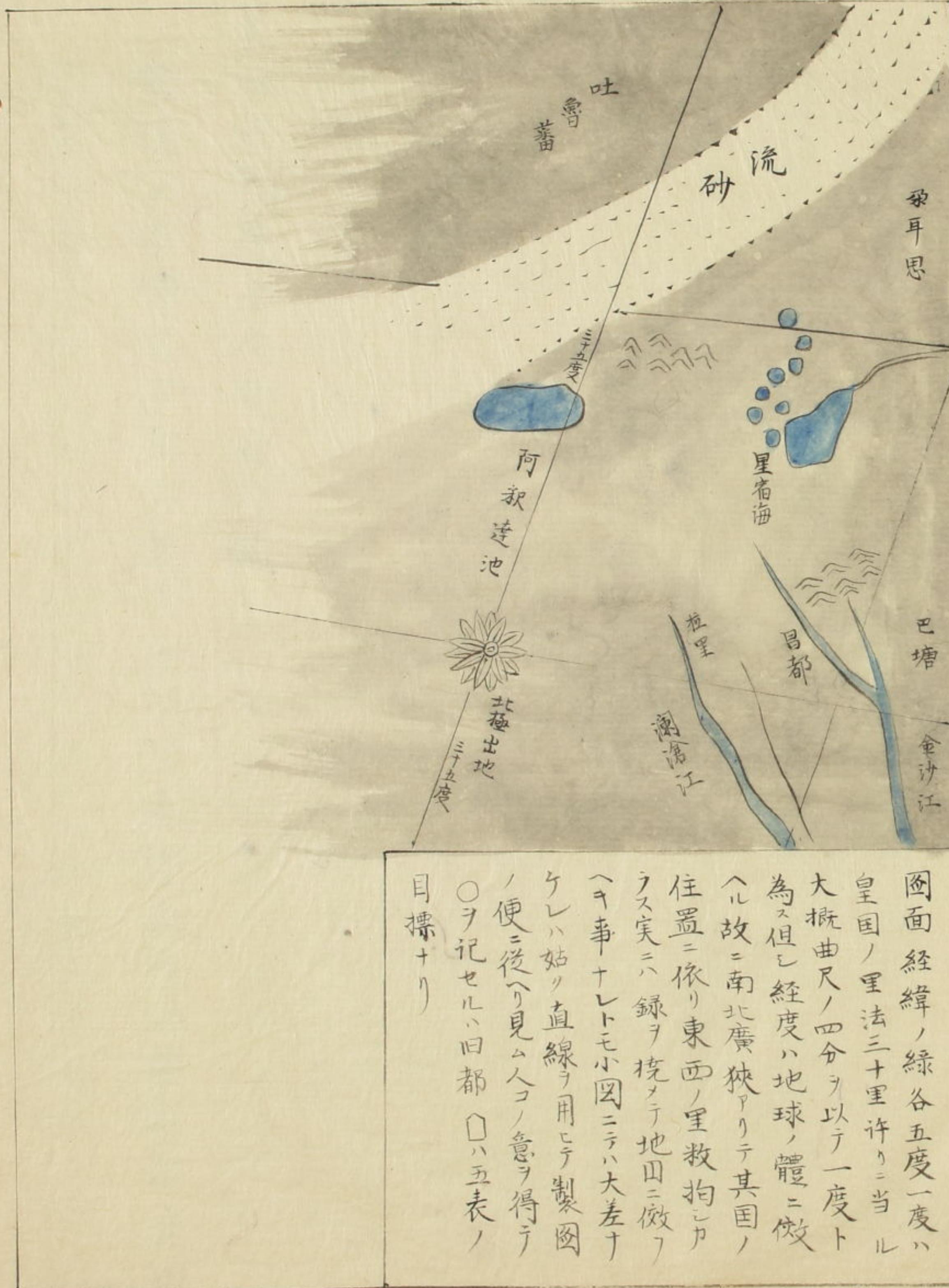
大荒東經ハ有リ招搖山。融水出シ焉シ。有リ國ト曰ク玄股ト。奈食使シ四鳥ト。
有リは、此ハ玄股ト之國ト。叔シ也シ。郭注シ。髀シ以下盈黑ト。故シ
云シ玄股ト以シ魚皮ト爲シ衣ト也シ。軀水鳥ト也シ。毛民ト之國ト。大荒北

経ス小も。有リ毛民モミン之國。依姓ナガシマ食ヒ黍コモリ使ヒ四鳥ヨウトリ島シマ生ス均カム國クニ。均カム國クニ生ス役ハラフ采ハラフ。役ハラフ采ハラフ修ハラフ輪ハラフ修ハラフ輪ハラフ殺ハラフ綽人ハラフ。帝念ヒツシ之潛ハシタ為ス之國。是此毛民モミンと有リ。然れハ夏禹サマヒュウの末スル也ヨリ。玄股モミン毛民モミン勞民ラウモミンと合せて三国。乃か扶桑モミンの北キタ在リる由リかれど。我が奥蝦夷オホシラフの嶋シマと云ハることに疑ウツ。毛民モミンの郭注カクツ云ハ。今去ル臨海郡リンハイ東南二千里有リ毛民モミン在リ大海オホシマ。州鳥シマヅチ上アゲル人ヒト短小而ハタハタ駢盈ハラハラ有リ毛如モヒコ猪能シラヒコ亢居カクル無衣服モモモモ云ハ。と云ハる風俗ブンソクは似ハシマリけれど國クニの所在スル方位違ハシマリヘリ。ニ毛民モミン説ツケと為スルべし。淮南子地形訓カイソウ三十六國ジンロククニの所す。自東南至東北方有リ大人國オトコクニ。君子國シロクニ。黑菴民モロコシモミン。玄股民モミン。毛民モミン勞民ラウモミンと有リ。是經トトロは採ハラフて載スルるなり。高誘注カウユツ云ハ。毛民モミン若失鍛モロコシモロコシ也ト。勞民ラウモミン正理躁カツリさて右條々トトロの方位説ツケ小拘コトコトりて。皇國擾不^ト定也ト云ハ。赤縣州トトロ相接シヤクする様リ度數トトロ小合ハラフせて縮圖シキズをること左。

の如スし允トトロて予ハ著ス出ス中シ。彼方カモシカと此方カモシカとの方位カモシカを論スルる件トトロには。皆是國トトロ子つスて索スルむべし。但シく皇國カモシカの目ヒて長窪ナガハラ云ハり赤縣朝鮮モロコシモロコシ及び蝦夷シラフ等トトロの境界カモシカ。まゝ度數トトロの矩カモシカは測量カモシカ所板カモシカの万國全圖カモシカ子ス御スル。赤縣州トトロの地形カモシカ及び地名カモシカ等トトロも玄珠モロコシ唐士治草カモシカ地圖カモシカの禹貢カモシカ職方圖カモシカ子ス本カモシカづき明カモシカの一統志カモシカ。まゝ國云編カモシカかス諸國カモシカの國說ツケ子ス校スル。中シ子ス朝鮮モロコシの國カモシカを三國通覽カモシカの附圖カモシカ子ス本カモシカ於文且カモシカいスル。一寸皇國カモシカより。日本府カモシカと置スルて取スルりゆり一時トトロの古說ツケを古典カモシカ考スルへ合スルて安藤直彦カモシカ子ス令製カモシカと大蜀カモシカあると今かカモシカ縮スル國カモシカセし。より精カモシカくスル也ト。大國カモシカは就スルて見スル也ト。







七

東方句芒。鳥身人面。乘兩龍。

郭注云。木神也。方面素服。黑子曰。昔秦穆公有明德。上帝使句芒賜之。壽十九年。卜言吉。禮記月令云。孟春之月。其日甲乙。其

帝太皞其神句芒。鄭玄云此蒼梧之君木宿之臣自古以来著
子曰重為本庭者也淮南の時則刑也東方之極自碣石山過朝鮮貫大
人之國東至日出之次搏木之地青土樹木之野搏桑皆日所
出之太皞句芒之所司者万二千里大皞伏羲氏東方木德之
地也太皞句芒之極自碣石東至日出搏桑之野大皞句芒
尚書大傳云東方之極自碣石東至日出搏桑之野大皞句芒
司之有不本編高辛紀さて海外東經全文云
云竟とり故上黑菴国の條云説遺と云。湯谷扶桑の事をし
も復更小論はひす彼の文子在黑菴北居水中大木と云
るも卽謂ゆる扶桑云て九日居下枝一日居上枝と有は例
の繪付乎て彼十日と称せる羲和の十子の一人を上枝云

昇り居し九人も下枝小昇り居と云の由かり。そもす
大荒東經云湯谷上有扶木一日方至一日方出皆戴于鳥
七有ると合せ考ふるか十子相代りつ此高木小昇りて
身と暴せる因象小てこそ沐浴の故実と聞えどり。然ると
美和生三十日とわる所子も右の如く十日と十子と後つ
九日居下枝一日居上枝といふ所子も傳曰天有十日日之
數十此云九日居下枝一日居上枝大荒東經又云一日方至
一日方出云てして莊子淮南子を始め諸家を引て天日の
十箇万の由を證し廣注まゝ畢竟が注も曰後かれど皆非
至り天子豈真の十日有むや殊子実の日象からひ子云
戴鳥とはちべくも非モ人形れりし故子かく云へり文云
よく心をつけたるふべきなり得一々く云は日中有鳥
ト云へる。旧文俗說を引出る人七有ひ。そぞとは取づ淮
三五本国考の未條云每ふるを見て知べり。そぞとは取づ淮
南の天文訓云日出于陽谷路于感池拂于扶桑是謂晨明登

于扶桑爰始。將行と有る陽谷も。即上の大壑。甘潤。湯谷小て。
諸書す。或云陽。また暘野とも作されど。共云此谷の名小用
ひ。は易の義もれ。二字同音少て。こそ本編小委曲せ。云
如く天日の始わて分判せる谷かる由緒小因り。元易こ
こより建ヨリ始まる故の名なり。然れど海外東經ある湯谷
都賦云。經扶桑之中林。魚湯谷之傍。市トモ水注。湯音陽と
云。是正義なり。されど陽もる不阜ハシタ。後ふ字子トモ。迂遠か
きむ。実子る湯陽とも云。音易とこそ注を以れ。謂カ陰陽と
陽の正字は会陽の字と用が云。正一きこ。本編小いふ
如かれぞ。斯テ畢沅ブイクン校正本字。之れ。巴虞。古室。碣。夷。日。
陽谷。說文作暘。史記。索隱云。史記。日本。作湯谷。淮南子。云。日。出
暘谷。浴于咸池。按。湯。暘。暘。皆一也。と云へる。余と同意。說文
か。さて自。を。暘谷。子。出。て。咸池。小浴。し。扶桑。小松。云。云。は。

天日の此より始りて分出せる古後アヒ。彼。十日の扶桑。湯谷。小
沐浴せる故事とを合せて。日アヒ。小新子アヒタガ。を。谷。より。出行。云
趣。小章アヒタガ。れ。也。文。詞。から。さる。天日は。もし。其。生。り。始。り。の
生。り。出。る。物。よ。及。非。ざ。る。こと。神。興。や。古。傳。よ。大地。と。成。る。べ
成。れ。る。由。か。る。子。思。い。合。せ。て。か。く。而。論。ふ。か。り。近。き。年。こ。ろ
何。人。子。や。日。月。東。湧。地。平。圓。説。とい。か。物。と。著。して。日。月。共。一
日。く。子。大。東。洋。中。よ。り。新。子。成。出。る。物。か。る。と。の。神。代。古。說。字
得。て。蝦。夷。地。四。十。度。の。所。子。十。釐。子。實。見。せ。る。由。の。説。而。り。と
聞。り。予。未。其。去。を見。ね。ど。暗。云。其。後。生。遂。ニ。と。勿。れ。实。小。は。天。日。及。ひ。其。大。御。神。
この御國。よ。を。生。坐。せ。れ。と。大地。を。放。リ。宇宙。と。照。世。ト。為
り。て。は。天。日。の。も。と。生。出。し。如。と。は。云。べ。れ。れ。ど。日。に。子。新。子
此。御。國。よ。り。出。と。は。い。ふ。べ。く。ら。ば。と。か。づ。け。し。扶。木。の。わ。り
一。地。と。い。ひ。そ。の。地。え。も。そ。こ。ち。皇。國。よ。て。け。子。も。春。氣。是。子
り。發。生。し。て。万。物。を。鼓。動。し。万。國。を。育。養。そ。る。こ。と。顯。然。これ

不曰トヨこの地より出づといふも
いえれなき説といひふべからば。されば搏^ハ名^ト陽谷と天
日の出るとるところとひふ説の也。眞の古傳の遺れるかて。
十日の後も別小故事の混淆せるもの有ること。三五本國
考の未條もくとく辨明するをもつてふるへく王充倫
者の倫日且出扶^ム暮入細柳扶^ム東方地細柳^ム西方野かり
云柳^ハ天地之際日月の常^ニ所出^ム之處と向て曰公歲の
二月八日の時^ニ日^ニ正東^ニ入り正西^ニ可謂日出^テ扶^ム入^ル於
細柳<sup>今夏日長之時日出於東北^ニ入^ル於西北^ニ冬日短之時日出
於東南^ニ入^ル於西南^ニ冬与夏日之出入在^リ於四隅扶^ム細柳^{正ニ}在
何所^ニ所^ニ論^ム之言猶謂春秋不^ニ謂冬与^レ夏也とソヘ^ル倫^ハ上
小論^ヘ古義を去らざる論^ムあり。そは夏を東北^トうりて
冬^ハ東南^トうり出れど春分秋分これ東西の正位かれり。こ
れを木として東より日出て西より入^ルさて次^ニ天文判^ス
トハふよ子細をきことゐる事^ナや。陽谷咸池トニ名を称せれどこれも同所の吳名なり。とも
陽谷咸池トニ名を称せれどこれも同所の吳名なり。とも</sup>

山海經^シ湯谷^シ浴^ス有^リと有^リと。浴^ス咸池^ト入^ルと有^リと著く
こいひマカラ對文の格^ト其^ノ例^モ下^ニ委曲^{ツヅラ}と論ふ如く
狀^シ若木^ト同樹の吳名^シると。楚辭離騷^シ飲^ム余馬^ト於咸池^ト
兮^シ揔^シ余轡^ヲ乎^シ扶^ム折^シ若木^ヲ松^ヲ日^ト文^ト類^シたり^{王逸^ゲ注^シ}

也^シ揔^シ結^シ也^シ扶^ム日^ト所^レ松木^也言^シ我乃^シ往^シ至^シ東極^ニ野^シ飲^ム馬^ト於咸
池^ト與^シ日俱^シ浴^シ以^テ累^シ己^ヲ身^シ結^シ我事^シ雲^シ於扶^ム以^テ雷^ヲ日^ト行^シ幸^得不老
延年壽高大^ト也^シいへるを^シよく叶^{ヘリ}然^フ若木^ヲ以^テ松^ヲ擊^シ日^ト使^シ之^ヲ還^シ去^カと云
を別木^の如^シ後^シよ^シ折^シ取^リ若木^ヲ以^テ松^ヲ擊^シ日^ト使^シ之^ヲ還^シ去^カと云
ひ或^ハ謂^シ松^ヲ蔽^シ也^シ若木^ヲ郭^シ蔽^シ且^シ使^シ不得^レ過^ル也^シとも說^シ淮南
子^シの高傍^シ注^シ松^ヲ猶^シ過^ル也^シと注^シせる子^シと皆非^{カリ}。こそ拂^ハ被^ハ
周^シ韵^シ子^シて^シ實^シ扶^ム折^シ取^リ物^シを^シ也^シ。さて如此考へて後^シ
沐浴^シの二字^シふと心歎^シりて説文^シと檢^シるよ^シ沐濯^シ鬢^シ也^シ水
木^シ浴^シ酒^シ身^シ也^シ水^シ谷^シ声^シと^シ有^リて木^シ小^シ作り谷^シ作^シ

所以字注せ文茲子段玉裁^クが注よ沐字を引伸^{テテ}為^ス芟除^ス之義
如筐子云沐涂樹之枝^シといひ浴字す老子浴神不死。河上公
風浴養也夏小正黑鳥浴浴也者避乍高乍下也皆引伸之義
也と云へり。河上公注の老子今李^チも普通の如く谷神不
死谷養也とありて其餘の諸本やも浴神と作
いふとハ未^タ見及む文故研しむ人も有^リるもニ^シて^シ本編^シ記せる
誕の人子非^リ見る本も有^リるもニ^シて^シ本編^シ記せる
谷神玄牝^{シナヒツ}や^ゲて^シ陽谷^{ヨウガ}なりといふ已^シが考^シ今按^シする^シ筐子
ヘ子も叶^{ハシ}て^シ曲^{ヨシ}前^ケけ^シかの本^シり^クし。今按^シする^シ筐子
も経童篇^{シキドウバン}子^シ沐途^{ムツ}菟^ウ之樹枝^シ使^シ每^{シテ}尺寸^{シチ}之陰^{イニシ}また沐涂^{ムツ}樹之
枝^シ也^カど有りて樹枝^シを伐^{ハシ}ふ^シれり老子^チも谷神^シも浴神
と作^シる木の有^リも古^シも水を从^シくるも浴と同音同義^シ^シか
りし故小錯れしかつ沐^{ムツ}洛^ラの二字ともす扶^シ吾^シ陽^{ヨウ}谷^ガ子木^シ谷^シ

せる故事より起れる文字れること疑れし。然れハ二字共
小木^シも从^シふ。中^シよ後の校意^{シラフ}あり。大抵諸字子謂^シる會
意^シを以て扁^シと从^シふ。本義^シを失^シひとる類^シも今數^シふる小
暇^{シカ}らば上子謂^シる湯^シ暘^シ陽^シ場^シか^シも乃^シ其^シ一例^シと知^シヤ
然れどこも今頃^シは臆斷^シせる下^シかれ^シ他の字
シ^シども相類^シせる説^シの有^リや無^シや知^シカ^シ事^シ夏小正
と引^シるは其十月の文れる^シが黒鳥浴^シの三字^シその本文^シ
て以下^シ戴^シ氏^シが傳文^シたり然^シる子此^シを阮元^シ補注本^シの一
本^シ。黒鳥^シ者何^シ也鳥也浴^シ也者^シ恐^シ乍^シ高乍^シ下^シ也と有^リ乎正^シ
為^シべし。然^シる有^リ也恐^シ乍^シ高乍^シ下^シ也と云^シるは浴^シと翼^シの義^シ
取れる^シ也甚^シトモ非^シ説^シか^シ。こそ早^シく渡邊^シ之望^シが夏小正

埒解といふ也。浴者猶浴乎汎之浴。此言時有鳥浴于水涯也。ト云へるを用ふべし。か不^レ艾、既^レ子、予^レ幼^レ而在田塾^レ与農圃小春之際。種^ス麥^{ヨリ}草^ル之時。敷^ス沢溝^ス渠^ス往^ス有^ス浴水^ス之鳥村童野老見^ス以^テ鳥雨候^ト也。嗚呼先王敬^ス小^シ之明。徵^ス諸本邦今日而^ス不繻矣。况^ヤ其大者庸得不畏敬乎哉。但是此等事真儒之所用心^ス而以博雜虹愚蒙^ス以^テ鳥禽^ス贊^ス出^ス幕之所忽且大笑^ス也。学者所須^ス当^ス查^ス者也。トシ云^スひて上代よりかく鳥浴の説ありし故^スヘリ。諾^スを^ス言^スれり。思ふ。彼^ス姜和の生^スる十日^スの子等^ク頭^{カニラ}小鳥形^スを戴^スれ思ふ。彼^ス姜和の生^スる十日^スの子等^ク頭^{カニラ}小鳥形^スを戴^スれ事^ス。此^ス鳥の浴^ス小效^ス古儀の因象^スある。そを鳥^{カニラ}ハ浴^スて後^スか札^ス木^ス小^シ掘^スりて翼^{カニラ}と冲^ベ手^スに物^ス分^レれ^バ如^クリ。前^{カニラ}も鳥浴^ス字今も雨候^トもれ。頭^ス鳥形^スを作^スり載^ス木^ス谷^スて雨^スを祈^スれる因象^スからむ。そも大荒東經^ス。黃帝の應龍^スを使^スひ。蚩尤^スと殺^スセ^スと記^ス文^ス中^ス子旱^ス為^ス應龍^ス之狀^ス乃^ス得^ス大雨^スト有^スり。其^ス郭注^ス子今^スえ土龍^ス本^ス此^ス氣應^ス自然^ス冥感^ス非^ス人

所能^ス為^ス也。ト云^スる矣。神農氏の祈雨止雨法^ス思ひ合^スて万^スつ^スみか^スく^スト^ス神聖の道^ス分^レる^トと^ス知^ルヘ^スと^ス云^スりし^スト^ス今^ス按^スへ^スさ^スる儀^ス然^スら^スは其^ス大壑^ス其^ス澗^ス陽谷^スと^スよ^ス咸池^スと^ス云^スりし^ス美^スは如何^スいふ。池^ス初學記^ス。此^ス谷^ス下^トと^ス曰^ス天池^ス。一曰朝夕池^ス。亦^ス云^ス大壑亘^ス壑^スと^ス有^スる池^ス。地^ス字^スと^ス共^ス女会^スの義^ス。咸^スも感^スと通^ス。易^スの沢山咸^スの咸^ス同^ス。交^ス咸^スの義^ス。謂^スウ^ス湯浴咸池^スや^スが^スて大池^スの会門^スれる^ス故^スセ^スて作^スれる^スこと。說文解字^スを見て知^ルべし。然^スれを池^スと^ス統^ス字^スも。女会^スと因^スれる字^スを^スること。謂^スふも更^スかり。博物志^スの古說^ス。子曰乾動直靜專坤動開靜翕^ス其根也天根^ス。毎日兩度^ス蹴^ス入^ス尾間巨壑^ス則^ス海沸^ス出^ス潮^スと^ス有^スる如^スく。天日より降^スる玄牡^スの氣勢^ス。毎日兩度咸入^スて。天易地会^スの構精^スあ

又潮以とれを池かる由の名かり。是と以て黄帝出る。こ字
玄牝之門。天地根と云す。さるは天地と分れし会門。され
ばかり。**柳和漢**^{柳和漢}の古傳子。天地の初より一物大空。生れり
地とよ分れし。天地初分と云へり。是と以て天日。常。物
玄牡の象と。建。大地。常。その氣勢。玄牡。受。天地。物
の豪。成。わ。り。これ。会。易。構。精。の大。意。か。リ。此子。資。り。て。万。然。る。女。玄。牡。天
根。ま。時。女。人の。会。感。に。る。と。わ。り。彼。阿。具。招。子。畫。猿
し。こ。る。賤。女。ま。サ。昊。顓。頃。か。れ。母。と。ろ。子。感。せ。し。耀。光。虹
の如。し。と。云。ふ。物。も。肌。も。ち。是。か。り。但。この。玄。牝。玄。牡。の。精。羨。
地。の。実。理。み。仰。觀。俯。察。し。て。細。密。よ。考。へ。と。る。説。有。れ。ど。そ。も
今。こ。、。よ。女。百。中。一。字。し。ち。こ。ト。能。え。も。然。れ。ど。斯。計。り。の。**顛**
緒。う。り。と。も。言。を。て。も。心。得。く。と。き。と。わ。ら。ひ。と。如。此。と。記。し
つ。委。く。女。羨。と。探。ね。か。ト。思。く。由。古。史。傳。の。天。地。初。發。の。條。と。

また禊祓の條と。赤縣太古傳の
三皇紀とと合せ見て知るべし。黃帝の樂。名を咸池と称ひ
しも。是池の名より出たり。されど唐堯の樂。名を大咸と云
ふ。し。此。義。る。と。知。べ。し。矣。尔。年。周。礼。大。司。樂。大。咸。の。鄭。注。
小。咸。皆。也。池。施。也。言。堯。德。無。所。不。施。也。ト。さ。て。此。咸。池。陽。谷。也
が。て。速。鞠。の。端。門。と。神。典。子。謂。つ。速。吸。門。か。る。小。就。て。思
ふ。よ。此。よ。り。や。西。方。筑。前。國。の。北。面。を。る。玄。界。洋。ち。ふ。邊。よ
伊。邪。那。岐。大。神。の。禊。身。ま。せ。る。橋。小。戸。あり。柳。大。神。こ。よ。て
祓。除。も。為。給。可。れ。ど。其。初。よ。速。吸。門。を。見。り。ふ。よ。潮。太。く。急。し
と。橋。小。戸。よ。て。祓。し。り。へ。る。と。思。ふ。よ。其。汚。惡。え。謂。か。る。大
聲。岳。底。之。谷。と。速。吸。門。よ。り。根。國。へ。祓。ひ。み。は。む。と。の。御。事。

みて畏れれど此時生坐る日神月神の御初浴しタリしも。決めて此端門からむと推察らる是事の精説主と此子記の段と太古傳の三皇紀とすら然れハ神世ニ神等の御禊也。注セると合セ見て知ベし。然れハ神世ニ神等の御禊也。大々々此水門にて奉為多ひれむ故その由緒よりて。姫嶋ニ住むる美和まと其産むる子等と常子この谷小て浴せし事とこそ想するれ。備ふく惟り続くれる。前ニ顛頽の大壑よ。其琴瑟々棄とりと有るも。謂カテ被具々棄くるか。て是はト大神乃御身小附タリト物とも皆ニ、子棄ぬひ。例と傳へし懲れること知ベし。さりと彼國の沐浴禊也。かとの所為き可シ。皇国子習ヘると小を有れるそぞ説文を始り字

出トシニテ祓除^ノ惡祭也。竹示^ノ友声^ヲ徐曰^ク按祓之為言松也。除災求福又禊也。又除也といひ禊はしと潔字^{シテ}臨^ス水我除^ス也。かト有るをみて知ベし。皇國の身禊祓除の有趣み矣。これとなく聞えたり。因子記云我^ハ漢^ノ月^ノの号^{アリ}大壑^ト称^ス。下ニ二十三爻の時から^{タリ}。一日ふと莊子の天地篇を披きれる。子東^ハ大壑^トいふ。各わる由^ハ夫^レ大壑之為^ル物也。注^ク孝而不滿^ト。辭^ト孝而不竭^ト。吾^ハ將遊孝^ト云^ク。文^ヲ之^テ面白く覓え其項^ヲ漢學^ヲ專^シセ^ル。時^ヲれど深き思慮もなきことを引と^テ物^ヲも記^シ印^シ少^シ作^リ。在^リるより十年はかり前より^テ。大壑^やがて玄牡^之門^ヲ賜^フ。咸池^{百谷王}かる下^トと知り^ト。每^ニ所^ニ思^フ子^ハ陋^キ哉^ト。已^ハ引^フ。殊^ハ別^レ。子^ハも方^ハなく^テ僻^ニ是^ノ号^ヲ用^フ。と云^ク。これ不意^モ先^トと^テ知^得て^{タリ}。甚^く畏^リ。僭^上れる下^トは思^ヘど年^老未^用ひ來^リ。別^レ。子^ハも方^ハなく見^ム人^其。諸^云の説符合して。吳論あるとかし。こそ楚辭東君^ヲ也。諸^云の説符合して。吳論あるとかし。こそ楚辭東君^ヲ也。歌^ハ嘵^ハ將^ハ出^ハ今^ニ東方^ニ其^ハ容^穎而^ハ盛^大也。照吾^ヲ撫^フ扶^フ吾^ヲ謂^フ

日也。檻梢也。言東方有扶桑之木。其高方。仅日下浴於陽谷。上拂支。扶桑爰始。而登照曜四方。日以扶桑為舍。故曰照。吾檻今扶桑。梅余馬兮安驅。云々。東君とは卽日と称り。まと上よも引とる離騒。予飲余馬於咸池。兮咸池日也。總余轡乎扶桑。總結桑。日所拂木也。折若木以拂日兮云々。哀時余。左祓挂於榑桑。右祓於不周兮。云々。れかふ不有り。不周とも。西極之山の名か對して道德の盛大にして包ざる所かきな比へと。ふり。呂氏春秋求人篇。禹東至。搏木之地。為欲篇。禹至大夏。南至北户。西至三危。東至扶桑。不敢亂矣。高傍注。乱猶離也。淮南子天文訓。小日出于陽谷。浴于咸池。拂于扶桑。是謂晨明。陽谷。本文咸池。とく。上。子引。離騒の詩。子合せて思。子。陽谷の一名。を。出。于。陽谷。浴。于。咸池。と云へるは。上。子。云。る如く互文。

リ登于扶桑爰始。將行是謂朏明。至于曲阿。是謂旦明。云々。高傍注。朏明。將明也。且。地形訓。世界の大九州の名字出でる所。正東。陽州。曰。申土。ト見え。扶木。在。陽州。日之所贋。とも。登保之山。暘谷。榑桑。在。東方。高傍注。暘谷。日之所出也。榑桑。在。登保之山。東北方也。とも。有少て論ひ。並し類。子此。名の出。る。も。今。計。ふる。子。暇。あらば。そく。りて。其。榑桑の字義。も。許慎。が。說文解字。木部。木。榑字。榑。神木。日所出也。後木專。壹。段玉。裁云。艮。下。曰。日初出。東方。暘谷。所登。榑桑。木也。然則。榑桑。即。木也。東。下。曰。後。日在。木。中。果。下。曰。後。日在。木。上。皆。謂。榑木也。淮南子。高注。亦。曰。榑。同。部。子。扶。也。扶疏。四布也。後。木。夫。声。段注。扶疏。矣。日。所。出。也。今。依。玉篇。立。音韵。讐。集。韵类篇。正。扶。支。言。扶也。古。去多。作。扶疏。同。音。假借也。上林賦。垂條扶疏。劉向傳。梓树生枝。葉扶。

疏上出屋楊雄傳枝葉扶疏呂覽樹肥使扶疏是則扶疏謂
大木枝柯四布疏通作胥亦作蕪鄭凡山有扶蕪毛曰扶蕪扶
胥木也。見扶搏トシム徐鍇が音註す防毎功ト有リ。然
れも諸古子扶字を去くるも假借小て正クライヒ元て扶字
小改むべきよりト有リて是も防毎加子ト同古子羽
日初出東方湯谷所登搏ゑ又木也段注_{日初}出東方湯谷所登也
搏ゑ已見木部此从立文當如是離騷總余唐字扶ゑ逝若
木以扶日二語相聯蓋若本節謂扶ゑ技若字即扶ゑ字也象
形技葉丸ゑ之屬皆从ゑと見え徐鍇が音註す而灼切ト言
蔽翳丸ゑ之婀娜也爾雅注曰婀娜垂條也此又不音右直象
形耳東方木德故有神形耳略切ト云ヘリ。桑を蠶所食葉木从木又見徐鍇
が通釈小黑於東方自然之神木加木以別之自然ゑ字象形

而簡也斯郎反ト云ヘリ段注多く搏ゑ者ゑ之長也故字从
也息郎切此等の説ニ依れる。扶搏トシ子其音夫カリ扶ゑ
のゑは。もとゑ字トキ其音は而灼切下ト若ふれむ扶ゑを
フジヤクと唱ふべきと。フサウト唱ふるもゑ字を去より
起れた後の龍音たり桑を通釈小斬郎反ト有れる音サウ
ト熟字せるゑをば古ト後りて。ヤクと唱ふべきこと著
明たり古今韵會より字の所母若木東海木名也と見え。從
本也トリひ若字の注音弱若木木名もどおり上子引さ
る說文及び通釈ト思ひ合モベ。また小林元儒云ゑ字
の音若ある故も中村彙林の学山錄子揚慎が答李仁丈云

を引きて日之为字有入恩任日是其四声其音若音然是其
切譽音若日生於若木故モ詩之音叶之音然者日本陽類而
影本故楚辭之音叶之今楚南方言猶呼日顙為然頭是其證
也と見カ子不音ジヤク又セフ子ノベキこと備ニ考得
ムリ。そそ山は草の初生葦牙の萌出る貞ヨリテ生青出中
薺若かど皆此字ニ因テ製れるケリ。そは豫て承それる字
云を作らひさて又木即搏矣也ト有れも同木ハルニト倫
時ニ云アヘシカド。山海經淮南子れど小東海の扶矣とは別モ若木
ヒカラキト。山海經淮南子れど小東海の扶矣とは別モ若木
ト名くる樹の有リハ所以わるトカリ。そそ戸子小大木之
奇靈者^{ハルヲ}為若トモ木食^{ハシ}之人多為仁者^{ナリテ}為若木トモ有リテ。
東方の真若木の奇靈かるより。他木の奇靈れるよも然モ
名けしる。戸子の全玄^ヤも早く込ヒトリ。今引く文^サも然^サ
え山海經大荒北經^サ。大荒之中有衡石山上^ニ有赤樹青葉赤

華。名曰若木。西山經。多搖木。之有若木。有是。若木似
の文意也。赤樹といふ木なり。青葉赤華ふるが、若木。似
る故也。若木と名くと云うりと聞え。西山經の文意と。搖木の
奇靈子。下。若木の如き。が多しと云ふ意と聞え。そも
郭璞注。右。より。舉。了戸子の文を引いて此と共。よ。真の若
木。からねど。若木と名り。大。より。思ひ合へし。
よ。後。と。とも思ひ合へし。と。海内經。南海之内。黑
水。青水之間。有木。名。若木。若水出。事。ヨリ。有るも。彼國の海内
南方かれど。真。若木。非。こ。晋の誓倉。南方草木状。小。
朱槿花。莖葉皆如荔枝葉。光而厚。樹高。止。四五尺。而其花深紅色。
五丈。大。如。泻葵。云々。有。樹。本草綱目。扶荔。と。名。く
と。李時珍。が。言。る。疑。此。樹。本草綱目。扶荔。と。名。く
す。作。り。て。人の。い。る。物。を。る。朝。開。暮。落。の。花。よ。て。休。槿。と。云
ふ。木。の。類。を。る。が。靈木。か。と。云。樹。よ。非。も。ま。く。甚。く。寒。氣。

と恐る。また淮南子地形訓。南方荒外の所。若木^ノ在建木^ノ西。未有^ト十日其葉照^ス下地^ヲと有^ル。真の若木は扶^ス木^ノ也。既て大樹の奇靈^ノ木^也。若木^ノも云^フよりして其真物^ノからぬ若木^ノ。扶^ス木^ノの形狀^ヲ混雜^シす。或^リ。そ^ニ未^ニ有^ル。日^ト云^フ。扶^ス木^ノ謂^ハ。説^レるを以^テ辨^フ。但^シ未^ニ云^フ。上^ニ云^フ。れど^ニ猶三五^日本國考^ノ未條^ニいふ字^ノ見^ベし。さて山海經小右のごと記^セるより。若木扶^ス木^ノ異木^ノ如く聞^カる故^ニ。楚辭^ノ。摠^ミ余^カ雲^フ。扶^ス木^ノ折^ハ。若木^ノ吹^ハ。日^ト詠^セるを始^ム。對句^ヲも作^レる文章^ヲ。もれ多^シをかしき。彼^ノ院籍^ノ詩^ヲ若木燿^ヒ。四海^ヲ賦^フ。扶^ス木^ノ瀛州^ヲ。云^ヒ揚^ハ。燭^ハ。渾天^ヲ。國^ノ出^シ。扶^ス木^ノ略記^ニ。崇峻天皇元年百濟^ノより仙舍利^ト

獻^スれる時^ノ。表文^ヲ載^セる中^ノ。伏^ニ清^ニ陸^下。照^ニ仙^日於若木之鄉^ヲ。掩^ニ慈雲^ヲ。於扶^ス木^ノ是^トなり。然^ニ出^シ等^ニ東海^中。若木國^ト云^フ。國^ノわ^リといふ說^ノ開^ハいて。其^ノ扶^ス木^ノ神木何所小^ニ疑^フ。扶^ス木^ノ國^ノ祀傳^ハり。以^テ其^ノ扶^ス木^ノ何所小^ニ在^リし^ト云^フ。後^ニ又^ニ知^リ成^ニれど^ニ。上古^ノ扶^ス疏^シして在^リし間^ノ。彼^ノ國^ノ地方^ヲ。よく見え^トる故^ニ。其^ノ古傳^ハ遺^れるれど^ニ。至^ニ山海經^ヲ。東山經^ヲ。流沙^{三百里}。至于毘皋^之山^南。望^ム劫海^ヲ。東望^ム。禱^ス木^ノ。有^る字^以ても辨^フべし。但^シ此^ノ木^ノ多く往來^ひて在^ハる故^ニ。其^ノ語^ノ傳^ヘしゆ^ニ。遺^れるが^リ。其^ノ由^ニ三五^本國^ノ。彼^ノ望^ム放^ハれど^ニ。天日^ハ直^ニ其^ノ神木考^ハ論^フ。見^ベし。彼^ノ國^ノ望^ム放^ハれど^ニ。天日^ハ直^ニ其^ノ神木より出^スこと見^え。故^ニ。右^ノ如^ク傳^有。また東果^杏れど^ニの字^也。此^ノ木^ノ依^リて制^れる^カ。そ^ニ說文^ヲ。崇勸^也。從^木。

宦博說後日，在木中見元。徐錯_{アシ}通叔子。東方万物所申_{アシ}。前漢歷志子。東方東動也。易氣動物於時為動也。と云_{アシ}。春_{アシ}云。ひ說文段注子。木搏木也。と云_{アシ}。黃帝本行記の注子。東者動也。日出万物乃動也。東字後日。穿木以日出望之。如穿扶桑之林木也。かと有り。鵠會_{アシ}。小鄭氏曰。木若東在下曰杏。廣韻春方也。かと云_{アシ}。木也。日所升降在上曰果。在中曰杏。拂于扶桑是謂晨明。故東字日在木中登于扶桑是謂朏明。故果字日在木上。詩曰果_{トニテ}出日也。史記天官書曰日暉則反果上照于天榆閑。故杳字日在木下也。かと云_{アシ}。かて知_{アシ}。諸字出_{アシ}。皆此說を取_{アシ}て果字を日出又明白也。と注し杳字を冥也。深也。寛也。寂也。かと注せれど南西北の字_{スル}。

木子縁わ_{アシ}ひて本文小陽谷上有扶桑有黑菴北_{アシ}有九
說有_{アシ}と云_{アシ}。吉_{アシ}は扶桑_{アシ}域の下子。陽谷_{アシ}。黑菴_{アシ}。其間_{アシ}有_{アシ}こと著
明_{アシ}。是と以_{アシ}て上_{アシ}引_{アシ}呂氏春秋子東至搏木之地。青丘
之鄉。黑菴之國_{アシ}と有_{アシ}と同じ_{アシ}と。淮南子脩務訓_{アシ}。東至黑
菴_{アシ}。といひ。主術訓_{アシ}。東至陽谷_{アシ}。かと云_{アシ}へり。か不帝王世紀劉
編_{アシ}かと其餘_{アシ}。小も彼_{アシ}見えたり。おき嶽澗石山記_{アシ}。扶桑山_{アシ}在東海中_{アシ}日之
所_{アシ}也。と見え。大荒東經_{アシ}。大荒之中_{アシ}有_{アシ}山名曰孽搖。頤瓶_{アシ}上
有_{アシ}扶木。柱_{アシ}三百里。其葉如芥_{アシ}。郭璞云_{アシ}。柱猶起_{アシ}。有_{アシ}谷曰溫源谷_{アシ}。と
あり。此文中子頤瓶_{アシ}の字_{アシ}孽搖_{アシ}。小連ねて四字の山名_{アシ}。了_{アシ}。又或_{アシ}孽搖_{アシ}の山名_{アシ}。小_{アシ}。頤瓶_{アシ}別_{アシ}。茅_{アシ}。得_{アシ}。心_{アシ}。心得_{アシ}。が_{アシ}と_{アシ}。說文子頤_{アシ}。頭_{アシ}。頤_{アシ}大_{アシ}也。瓶_{アシ}。牡羊_{アシ}也。と有_{アシ}。然れ
む_{アシ}の熊耳_{アシ}。山牛頭_{アシ}。山_{アシ}の例_{アシ}。羊_{アシ}似_{アシ}。矛_{アシ}を以_{アシ}て。

四字名の山れりも知らば左より思ひ由て上引く
定り難れを今姑く顛叛の字とは用ひむ由て上引く
み地形利の高傍注す。搏木在^レ登保之山^タ云々と思ふ。搏
木所在^ス我が易州申土の一高山の上^タて其山の名
を孽搖山とも登保山とも扶荔山とも称い。然て其山の有
る一州を扶荔国と云ふ。著くが如其樹上^タ温源谷と
名けし。上池も有りしと聞かる。然る老大樹^{サリ}有れり。
さも有べきである。其所在詳からば^{サリ}郭璞注^ナ温源即^テ陽
谷^タ云はれていくに思ふも有^ハれり。此國^タ在り
て彼國^タより望むる程の大樹なれば^ハ谷とも云べき上池の
有るも何^タ疑はぶ。上池とも立木の空^タ水の湛へしと謂

ふ倍かり温源と云ふ字思へ在其上第^四條子引くる名山
上池の水の温れりしと聞えり。上第^四條子引くる名山
記の文。東岳廣岳山^在東海中青帝所都^ト有^ハる山。その名
は相似されば。こそ既子云^ハる如く於能暮吕鳴^{ナノコロニ}。東岳か
れど別山かり。是を以て名山記。扶荔山^トハ別小^ト舉^{アゲ}り。
思ひ混^ム小ベウラハ。五岳の^ト漢土内^カる泰山等の五岳
岳^ト知^ルる人^多く其名を知れど海外大五
岳^ト真五岳みて彼国内^シ夷^シ海外^シ謂^ハる五岳^ト天皇太帝の植^シひ
くは太古傳子云^ヘれど其撒^シて其易州扶荔の神域^ヤケ
畧^ス天柱五岳考^シべし。而して其易州扶荔の神域^ヤケ
化^セし神聖^トちの功績^ヲ諸^シ去^ス參政^シるよ^シく我^ガ皇
神^トさり比事迹^ヲ符合^シ。歎^シ皇國^ヲおきて然^シる神真の
本^レ木^ト了^ス國^ト。南西北の三方^ノとさり^ナなり。東方^ノト

小も別子のれることなしと以てこれを知れり。立本國こは考かすとの神聖しんじやううち披ひしこの神かみすあり此この神
小當こわいるといふことの概畧がいらんを述のべふると見て悟さとるべし
斯されてこの神別かみべつの上古じょうこよりりける趣おもも。東方朔とうほうせくがナ
州記しゆきを精きよめり。この人ひともくより仙風道骨せんふうどうくの人ひと。
太上たいじょうの真官まんかん。谷希子たにきしといふ灵仙りょうせん小伴まほはきて。凡人の得え
到いたるまじき境界きょうかいなし見廻みまわり。まゝ其師そのしの培いくれる舌説がくせつをも
聞集きみりて十州記じゆきを錄のせよ。本玄ほんげん小自記こじきセり。然しかるよ後ご
人の加筆かひんも往むく見えたり。又またそ詰つひて取とるべ。次卷つづきまきを舉ある文もを漢かん
魏叢ゑいそう云い笈七箋しちせん龍威祕りゆうゐひ列仙道記れっせんどうきをとす收めくろ本ほんども
安やす授合ゆうあして舉あく。ふり谷希子たにきしを第だい四條よじょう小引こひき。清靈真
人じん傳でん。東とう到いた青丘せいきゅう遇あ谷希子たにきし。有ある。皇國こうこく
の神人じんじん。太方傳たいぽうでんを見みて知しるやし。

